

始



1/2065

255.7  
372.34  
0.24



小川正行著

ヘスタロッチの生涯及事業

正  
8.8.15  
内交

東京目黒書店發兌



ペスタロッチーの肖像(中央のものは Zucorp の Pestalozzi) に掲げたるものに據る

(解説) 從來「ペスタロッチー」の肖像として、我が國に傳へられたるものは、H. Bamard の著 *Pestalozzi and his educational system* (1881) 中に挿入せるものに據れるが如し。同畫は(五十歳前後のもの?)其の相貌溫和、謹直、優雅に過ぐる感なきにあらず。之に反して、此の「ナトルプ」のものは(イフエルテン時代?)彼の思想家たると共に、又熱烈なる活力の所有者たることを示し、個性の表現著しく、遙かに前者に優されるものあり。故に此に之を掲げたり。

左上段、右下段(Biller. の著 1881. 中に在り)のものは、又彼の肖像として、歐米に傳へられたるものなるが、共に晩年時代なるべし。

序

今や、教育の理論方法に關する諸種の主張は、盛に研究論議せられて、微に入り細を極め、殆ど他に求むべきものがないやうである。然れども實際の施設は、中々其の効果を擧げ得ないので、世の爲政治家も教育家も、往々之を慨嘆して居る。抑其の根源は何處に在るであらうか。余は、之を以て學說理論の未だ盡

さざるが爲め、又は、其の方法、技術の不充分の爲めばかりであるとは考へない。果して然らば、現時教育上の最大缺陷は何であらうか。余は之を以て、寧ろ教育者の人格に在りと信ずるのである。一切の學說や方法は、人格の表現でなければならぬ。方法上の不備位は、他のものを以て幾分か之を補ふことも出来る。然しながら、教育の根帯たる教育者人格の缺陷は、到底、書籍や教授法を以て之を補ふ

ことは出来ない。たとひ、高尚な學說、理論を懷いて居つたとしても、眞に教育者の人格から發現して居らぬならば、果して何等の効果を擧げ得ようか。又教授上、管理上、幾多の方法を考案したとしても、教育者が衷心から之を信ずる誠實と、眞に己の我を去つて、之を實行しようとする勇氣と決心とを缺いて居つたならば、果して何等の効果を贏ち得ようか。嗚呼、理論か？、方法か？、人格か？。余は現時

の教育家が、我等と共に、深く此の點に關して、反省せられんことを望むのである。

「ペスタロッチーに還れよ、——將來に對つての解釋として、

——否、永恆に對つてのペスタロッチーよ。」

Zurück zu Pestalozzi!

und als Lösung für die Zukunft!

Pestalozzi fürs immer!

かの朝に唱へて、夕に忘れ去らるゝ片々たる教育論や、徒らに細密を極むる屑々たる方法論の如き、何等の基礎・根蒂もなきものは、恰

かも夕方の虹のやうなものである。之に反して、若しも我等にして「ペスタロッチー」の人格の幾分を有つて居つたならば、而して其の人格に根ざすところの若干の理論と方法とを有つて居つたならば、必ず幾分の成功を見ないことはない筈である。余は、夙に彼の傳記、特に彼の人格に對して、崇敬・欽慕の情を禁じ得ないものである。余が、己の無學と彼の爲めに執筆するの資格の乏しきを耻ぢずして、

此に、彼の傳記を書いたのは、實に、我が教育界現時の最大疾患の爲めに、幾分の藥餌を供し、併せて、又聊か、自己の崇敬・欽慕の情を抒べたに過ぎないのである。

今や、「ルッソー」の大言壯語や、彼の薄志弱行を喜ぶ者が、盛に横行して居るから、ペスタロッチーの人格の如きも、或は一部の徒からは、却つて舊式のものとして論議されるかも知れない。然しながら、彼の主義・精神からして、近代

の人道主義の文化は、其の華を開くに至つたのであつて、あらゆる社會は、悉く彼の人格と事業とに感謝せねばならぬのである。特に、現代の小學教育・師範教育、及諸種の博愛的教育事業は、殆ど皆直接・間接に、彼の人格と事業とに交渉を有せざるものはない。余は、現時の我が教育界に、「ヘルバルト」出でざるを惜まない、只、未だ一人の「ペスタロッチー」出でざるを恨むのである。願くは、我が教育界も、其の久

しく忘れ來りたる大恩人「ペスタロッチー」研究を、復び始むる機運に向はんことを切望するのである。余は、此にペンを擱くに方り、再び絶叫したい。「ペスタロッチーに還れ」Zurück zu Pestalozzi!」

大正八年二月

奈良に於て

著者識す

### 凡例

一、本書は、今を距ること約十七八年前、余が學生時代に於て、始めて Guimp's Pestalozzi, his life and works. を一讀して、大に興味を感じ、其の要點を拔萃し記録し置きたるに端緒を發し、爾來二三のペスタロッチー關係書目を閲讀せしが、後、Seyffarth, Pestalozzi. を讀むに及んで特に感ずるところあり。遂に本書の編著を企つるに至れり。

二、歐米諸國に於ける學界・教育界のペスタロッチー研究は、甚だ盛大なるを以て、其の文獻の多きこと、實



に驚くべく、試みに一千八百八十一年の出版なる Barnard. の著中に掲げられたるヘスタロッチー關係書目を見るに、當時既に、二百餘種の多きに達し、ヘスタロッチー文集の如きも、數種の刊行物を有せり。然るに、余の涉獵せる書目は、甚だ僅少にして、特に、未だ原文ヘスタロッチー全集(主なる英文ヘ氏關係書類に、は數種の文章附加しあり)をも通讀せざるは、大に遺憾とするところなり。然れば、本書に於ては、彼の傳記、事業及學徒の努力を叙するを主とし、其の學說に至りては、單に梗概を記すに止め、更に他日を待つて、之が研究を進め

んことを期せり。

三、本書は、從來、余の拔萃し置きたる材料に就き、一昨年夏季、始めて之を整理し、爾後數種の參考書を讀むがまゝに、附加訂正を施し、昨夏に至りて大體の組織を了り、更に昨秋より稿を起したりと雖も、公務多端にして、連續筆を執ること能はず、僅かに夜間に於ける二三時間内の業務となし、然かも、毎週二回若しくは三回を超ゆるを得ざりしを以て、其の文章形式の前後不統一にして、此の大教育家の事業と思想とを髣髴たらしむるに足らざるは、余

の深く遺憾とするところなり。

四、本書編著に際し、余の参考したる書目別記の如し。就中符號を附したるは、余の有益なりと信じて、特に参考したるものなり。只、未だペスタロッチー研究家として有名なる Morf の *Zur Biographie Pestalozzi's* を見ざるは、余の最も遺憾とするところなり。然れども、本書編述の本旨は、我國一般の普通教育者、特に小學校教員諸君并に師範學校生徒諸子の爲めに、教育史上の参考資料を提供し、併せて教育的読み物として、聊か修養の資たらんことを期せる

ものにて、専門學界の爲めにせるに非ざるなり。

五、*Pestalozzi* は *Pes-ta-lot-see*、ペスタロッチーと發音するを正しとすれども、書中屢、自己の慣用に從ひペスタロッチーと書したるものあり。讀者之を諒せよ。

# ペスタロッチの生涯及事業

## 目次

第一章	家庭及少年時代	一
	誕生及時代——家系——家庭——少年時代の教育、性行	
第二章	青年時代	三
	青年時代の教育——當時に於ける瑞西の状勢——瑞西協會の活動—— ——ルッソーの感化——農業計畫	
第三章	農業時代	四
	婚約——兩親の反對——農業の研究——新農場の開墾と經營—— 結婚——ノイホーフ新邸の建築——農業の失敗——紡績事業の失敗	

目次

一

## 参考書目

1. R. de Guimps, Pestalozzi, his life and works (1874.) translated by John Russel. 1890 (London)
- \*2. H. Barnard, Pestalozzi and his educational system. 1881.
- \*3. H. Holman, Pestalozzi an account of his life and works. 1908.
4. J. A. Green, Life and work of Pestalozzi. 1913.
- \*5. J. A. Green, Pestalozzi's educational writings. 1912.
6. A. Pinloche, Pestalozzi and the Foundation of the modern elementary school. 1912.
- \*7. L. W. Seyffarth, Johann Heinrich Pestalozzi nach seinem leben und aus seinen Schriften. (改版) 1904. 1909.
- \*8. P. Natorp, Pestalozzi.
9. P. Natorp, Pestalozzis Pädagogik.
10. Hunziker, Heinrich Pestalozzi.
- \*11. Uppers, Pestalozzis Psychologie und Ethik. 註 以上, 9. 10. 11. は, Rein, Encyklopädiaches Handbuch der Pädagogik. 中にあり, 各七八十頁に亙る大論文なり.
- \*12. J. K. V. Rauner, Geschte der Pädagogik. (七版) 1909.
13. K. Schmidt, Geschichte der Pädagogik. (四版)
14. F. P. Graves, A history of Education, in modern times. 1914.

第四章 教育事業の着手……………七

新思想の開展——ノイホーフの開放——貧兒の收容教育——事業の擴張——貧民の惡計——事業の失敗——一婦人の來援

第五章 著作時代……………八四

イセリンの勸告——隱者の夕暮の發表——不朽の傑作ゲルトルー  
ドの出版——其の他の著作——家庭の不幸——獨逸旅行——佛國革命

第六章 スタンツに於ける孤兒院の事業……………九

瑞西の革命——新政府に對するヘスタロッチーの盡力——スタンツ孤兒院の設立——院長就任——院内の狀況、彼の苦心と兒童の進歩——辭任

第七章 ブルグドルフに於ける小學校教育……………二三

スタツプエルの計畫——小學校就職及新教授法の考案——ブルグドルフ學舎の建議と學舎の生活——ゾーヨー及ゲルナーの評——學舎の發展——瑞西の内争と巴里會議——佛國旅行の失敗と收穫——ミュンヘンブクゼー移住——フエーレンベルヒとの聯合——イフェルテン移住

第八章 イフェルテンに於ける學校事業……………一六

イフェルテン學舎の發展——優良教員の輩出——學舎内の生活——兒童の日課——各種の作業訓練——グエーマン教授及佛人の觀察所感

第九章 イフェルテン學舎の没落……………一八九

ニーデラー又シユミッド衝突の原因——ヘスタロッチー反對學派の攻撃——視察委員の來校及評論——學舎改革論の衝突——シユミッドの退去——財政の窮乏——ヘスタロッチー夫人の死去——

シユミッドの横暴——教員團の退去——貧民學校の創立及併合——  
學舎の衰頹——門下及市との葛藤——縣議會の壓迫とイフェルテ  
ン退去

第十章 晩年時代……………二四六

晩年の著作——最後の論争——ペスタロッチーの憤激と發病——  
寛容なる遺言——臨終

第十一章 ペスタロッチーの人格……………二五六

風貌風采——フロツホマン及ゾーヨーの記事——愛情及同情——  
精力——謙遜退讓——好意信賴——粗忽率直——學術才能

第十二章 ペスタロッチーの交遊……………二八四

啓蒙時代の人材——カント——ルッソー——奈翁——フェーレン  
ベルヒ——フィヒテ——カールリッター——ヘルバルト——フロエ  
ーベル——ペル——

第十三章 ペスタロッチー學徒……………三〇〇

彼の學舎に於けるペスタロッチー學徒——獨逸に於けるペスタロッ  
チー學徒——英佛に於けるペスタロッチー學徒——米國其の他に  
於けるペスタロッチー學徒

第十四章 學說……………三三三

緒論……………三三三

第一 倫理觀及心理說……………三三五

自然的状态——社會的状态——精神作用の區分——知識的方面——  
——實踐的方面——能力說

第二 教育說……………三四三

教育思想の出發點——教育の目的——教育的觀念論——普通教育  
——調和的發展主義——社會と個人——教育の方法——方法の原  
理——直觀の原理——認識の範疇——教授上の原理——訓練

第十五章 主要なる著作……………三八〇

隠者の夕暮——リオンハート、ゲルトルード——クリストーフと

エルゼ——ABC書——ゲルトルードの教授法——白鳥の歌

目次終

ペスタロッチーの生涯及事業

第一章 家庭及少年時代

誕生及時代——系——家庭——少年時代の教育、性行

一、誕生及時代 近代普通教育界の大恩人ヨハン、ハインリッヒ、ペスタロッチー(Johann Heinrich Pestalozzi)は、西暦一千七百四十六年一月十日を以て、瑞西の「チューリッヒ」市に生れたり。時將に佛國大革命を隔つること四十餘年前にして、歐洲の大陸に於ては、佛、奥、西の諸國互に覇を争ひ、特に「フ、リ、ド、リ、ッ、ヒ」大、王、普魯西に君臨して、連りに

奥帝「マリヤテレシア」の領土を犯し、其の他、露西亞、瑞典、波蘭亦各野  
 心を逞くして兵戈を交へ、海上に在りては、英佛西の諸國又互に海  
 上權を争ひ、植民地の争奪に殆ど寧日なし。而して學界に於ては、  
 「ニウトン」前に逝き、「ライブニツ」亦歿し、科學及哲學創始の大業は、既  
 に起れりと雖も、之に繼ぐの士未だ起らず、異日果して、かの啓蒙の  
 大思潮が、澎湃として怒濤の如く寄せ來るべきやは、何人も豫想す  
 るを得ず。我が國に在りては、徳川中興の將軍吉宗、能く其の治を  
 效して文化漸く洽く、仁齋、東涯、徂徠、鳩巢等儒學の諸大家相繼ぎて  
 起りたる外、國學振興の新氣運も、亦將に萌さんとしたるのみなら  
 ず、吉宗、自から青木昆陽をして蘭學を講ぜしめ、遙かに絶東の孤島  
 より、西歐文物の如何なるものなるかを知らんと欲したる時にし  
 て、將に國民的自覺に入らんとする初期時代なりき。

彼の祖先は、伊太利人にして夙に新教を奉ぜしを以て、舊教徒の  
 爲めに甚だしき迫害を被ふれり。是を以て、「アントニオ、ペスタロッ  
 チ」Antonio P.なるもの、妻「マデリネ」Madeline.と共に、其の郷國を逃  
 れて、一千五百六十七年、アルペン<sup>1</sup>の嶮を越え、遠く瑞西の樂園に來  
 り、居を「チューリッヒ」に卜して、永く其の信仰の自由を保つと共に、此の  
 大自然の風光を樂めり。

<sup>1</sup> Pentalozi の綴りは、伊太利人の血統なることを示せり。

抑、此の「チューリッヒ」湖は瑞西の北境に在る大湖にして、四境の連  
 山は、遠く巍峩として蒼穹に聳え、湖岸に近き丘陵は、其の傾斜甚だ  
 緩なるを以て、都市村落其の上に相連り、鬱蒼たる森林又其の間を  
 點綴し、牧場、果園、點々相錯綜して、皆其の影を鏡の如く清冽なる水  
 面に映じ、風光の美なること實に繪畫の如し。

雲際に登ゆる

アルペンの高峰には、

永恒の氷雪を戴き、

大地を涵たす

幾多の湖には、

紺碧の水をたへ、

緑氈を

敷けるが如き高原、

―鬱蒼たる森林―

―突兀たる巖石―

―清朗なる空氣、

嗚呼麗はしき國土よ!!!



(景風のヒッリーユチ)

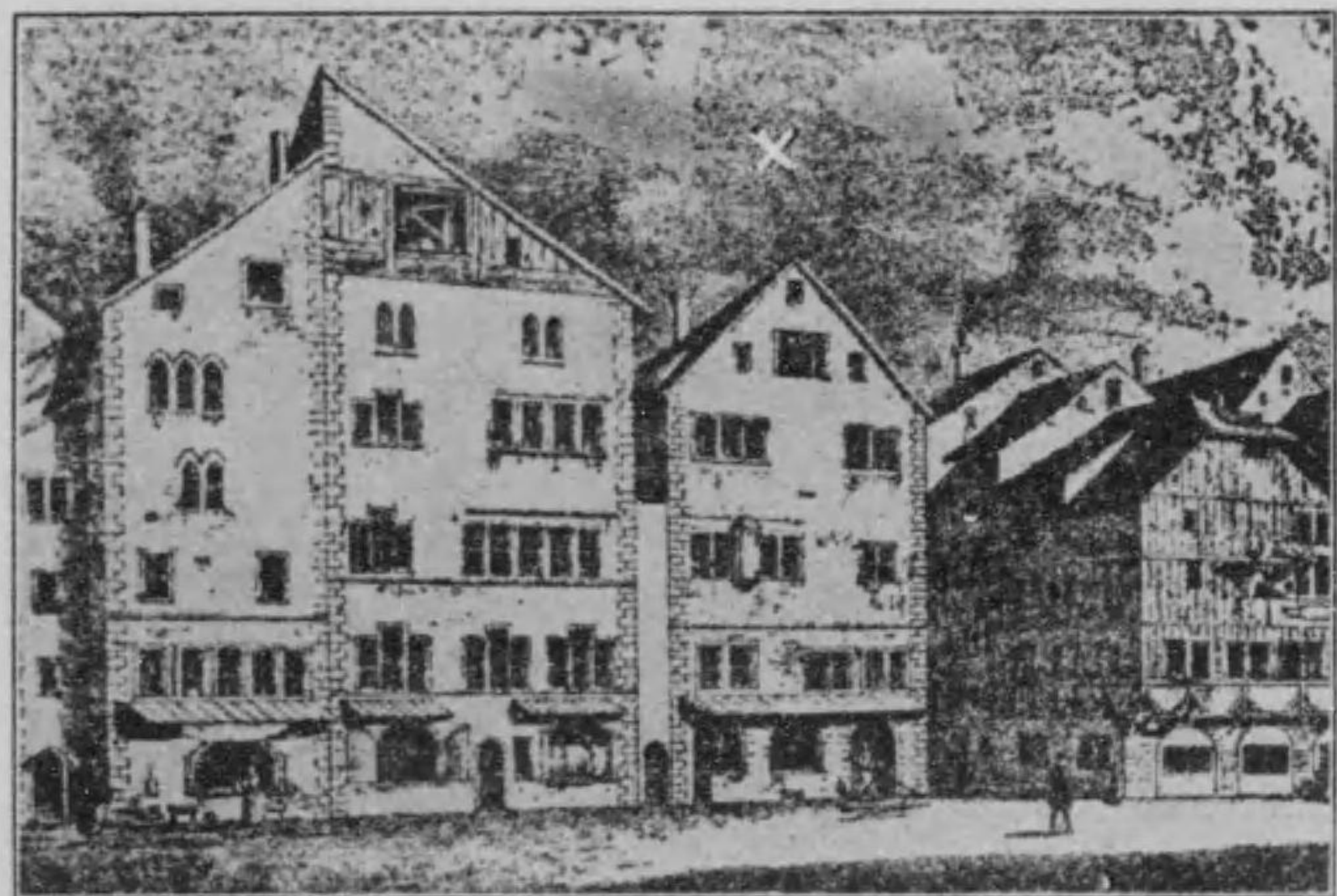
現今の「チューリッヒ」は、「リマ  
ット」河に跨り、湖畔より後方丘  
陵の上に延長し、河上には壯麗な  
る橋梁あり、寺院・學校・圖書館・  
博物館等、美麗なる建築物多し。  
人口約二十萬、絹織物・木綿・襪織  
製造等の工業盛大にして、同名の  
カントンの首府たると共に、國中第一  
の繁盛なる都市なり。市は、北瑞西  
即、「獨逸瑞西」地方に位するを以  
て、市民も往時より一般に獨逸語  
を以て國語となし、獨逸文化の感  
化を被ふること最も大なり。第十  
八世紀に於ては、住民尙少き小市  
に過ぎず、周圍に城壁、濠渠等を  
回ぐらし、城門によりて市民の出  
入を制限したり。

「チューリッヒ」湖より流れて、ラインの一支流「アール」に合するもの  
を「リマット」河と云ふ。市の中央を貫流して、自づから左右兩街の區  
劃をなせり。右岸の市街の狭く南に走るものは、即ち「ルーデンプ  
ラッ」街にして、「アントニオ」の一家は此に住せり。

「アントニオ」の後に「アンドリュウ」 Andrew. あり、牧師の職に在りて  
近郊に住せり。其の子「ヨハン・バプチスト」は、外科醫を業として此  
の家に住し、特に眼科に於て好評を博したるが、別に賣藥業を兼ね、  
又當時の慣例に従ひて家號を有し、「黒角」 Zimm Schwarzen Horn. と稱せ  
り。彼は、湖畔の小邑「リヒター、シュワイル」の名族「ホッツ」家 Hott の女、  
「スザンナ」 Susanna. と婚し、幸福なる生活を送れり。教育界の大恩  
人「ペスタロッチー」は、實に此の家庭に生れたり。

2 「ホッツ」家は世々醫を業とし、「スザンナ」の父及兄弟三人皆之に従事せ





(屋家の生誕 - チッロ タスル)

「ペスタロッチー」の誕生せる家は、今尚「ルーデン、プラッツ」街に存す。三層（別に地下室あり）の尠大にして不恰好なる舊式の家屋なり。間口は、五窓又は六窓を有し、入口は、直に街路に面せり。

(中央×印の家屋)

り。文學醫師「ヨハネス、ホッツ」及、後年、奥國陸軍中將となれる「コンラド、ホッツ」は、共に彼の女の従兄弟なり。

父母の性格

「バプチスト」に三子あり。長は男兒にして、又「バプチスト」と呼び、後年「フランクフルト」に於て商業を營みしが、失敗して北米に失踪し、後、全く消息を絶てり。次は即ち「ヨハン、ハインリッヒ」幼は女兒にして「バルバラ」Barbara. と云ひ、後年、「ライプツヒ」の商人「グロース」に嫁したるが、其の兄「ヨハン、ハインリッヒ」とは、兄妹永く友愛を保ち、晩年に至るまで、温き親交を繼續せり。

父、「バプチスト」は、生來、寡慾、清廉、正直にして、愛情に富み、仁慈の念極めて深き紳士にして、母「スザンナ」も、亦敬、虔、温、和、慈、愛の美德に富み、而かも意志堅固なる淑女なりき。然れども、夫妻共に意を蓄財に用ひざりしを以て、家計殆ど清貧に近かりき。抑、かくの如き純

潔高尙なる父母を有せる「ヘスタロッチー」は、たとひ物質上に於ては、多大の資財を享くことを得ざりしと雖も、精神上に於ては、莫大無限の遺産を相續することを得たり。他年、彼が一身を教育事業に捧げて、其の改良革新の爲に努力し、終に世界の人類をして、同胞の教育の一大義務なることを覺知せしめ、更に近代文明の新意義を發揮するに至らしめたるもの、實に、其の遠因を純潔なる此の家庭に發せりと云ふも不可なく、現時の文明、各國民が、此の寡慾にして、仁慈なりし、夫妻に負ふところの無量の恩恵は、永く感謝に値するものなりと云ふ可し。

## 父の死去

かくて、幼時、彼は、其の兄妹と共に家庭の教養を受け、幸福なる生活を送りたるが、千七百五十一年、彼が六歳の時、父は病に罹り、最愛なる三兒の養育と、清貧なる一家の經營の重任とを、其の妻の雙肩に残し、僅に三十三歳を以て永眠したり。憐むべし、名門に生れたるスザンナは、此に寡婦となりて、忽ち人生の慘苦を味ふに至り、幾度か其の三兒を伴ひ、良人の新しき墓に詣でて熱涙に咽びしと云ふ。かくて、彼女は、一大決心を以て、先づ交際社會より退隱し、家政の整理を斷行して、生活の基礎を固くせんと覺悟せり。彼女の長兄「ホッ」は、其の妹の生計の裕かならざるを知れるが故に、懇慫に勸告するに、郷里「リヒター、シュヴァイル」に轉住すべきことを以てしたりと雖も、彼女は、子女の教育上の不便を考へて、其の好意を辭し、依然として「チューリッヒ」に留まりたり。

かゝる不幸の際に於て、能く一身を捧げて、此の薄命なる寡婦を助け、其の子女の養育に任じ、一家の爲に一大柱石となりたるものを「下婢「バベリ」(Babeli)獨逸風の轉訛?)となす。彼女は、僅に數週前

## 下婢バベリ

に於て、地方より來り、ペスタロッチー家に事へたるものなるが、性質純朴にして敬虔の念に富み、且つ忠實勤勉なりしを以て、バプチストは深く之に信賴せり。彼の疾篤きや、バベリーを其の枕頭に招き、懇ろに後事を囑して、

『余の死後に於ても、願くは、汝、余の妻を見捨つること勿れ。若し汝の援助なからんには、彼女は、全く頼りなくして、到底自から三兒を養ふことを得ざるべく、或は彼等を冷酷なる他人の手中に委するに至るべし。』

と遺言せるに、彼女は大に感動して、

『たとひ、君、天國に到り給ふ日の來らんと、妾は決して君の一家を見捨つるが如きことなかるべし。若し君の令室にして厭ひ給はずは、妾は生涯留まりて、君の一家の爲に、微力を盡すべし。』

と答へたれば、バプチストは、深く彼女の忠實を喜び、其の窪める兩眼に大なる満足と感謝との輝きを示して永眠したり。後、バベリーは、堅く其の誓約を守り、有利なりし己の婚約をも辭し、全く犠牲的精神を以て、生涯を、ペスタロッチー家の爲めに盡せり。

ペスタロッチーの記すところに據れば、彼女は、本名を、バルバラ、シュミット、Barbara Schmidt. と云ひ、千七百二十一年、チューリッヒ縣に生れ、曾て高尚なる教育を受けたることなしと雖も、天性の美質は、能く助けなき、ペスタロッチー兄妹の爲めに、第二の母となり、人道の實踐及獻身犠牲に關する最良の模範を示したり。固より、彼の母、スザンナは教育ある婦人にして、高尚なる性格を有し、其の子女に對して與へたる感化少きに非ずと雖も、此の女丈夫的なる下婢、バベリーが二十八歳の妙齡を以て、ペスタロッチー家に來り仕へ、全く人生

の歡樂と希望とを擲ち、四十年一日の如く、其の主家の爲めに盡したる純潔崇高なる精神に至りては、實に感ずるに餘りありと云ふべし。他年、ベスタロッチが社會の弊風を見て、慨嘆措く能はず、奮然起つて不幸なる下層社會の教育と救済とに一身を投じ、全力を傾注するに至りたるは、一半は、確かに之を其の父母の遺傳に享けたるものなりと雖も、他の一半は、偉大なる此の下婢の感化に、負ふものなりと斷ずるも、恐らく過當に非ざるべし。宜なるかな、晩年、ベスタロッチが、其の著、白鳥の歌に、自ら記して、余は彼女を決して婢女として見ることなく、友人として見んと欲すと云へることや。蓋し、人の幼時に蒙りたる、無意有意の影響は、後來、其の人格を鑄造形成する上に於て、思ひがけざる至大の結果を生ずることなきにあらず。「ハイデンの搖籃に眠る時、其の母が常に唄ひたる輕快巧

妙の子守歌は、他年其の子の天才を覺醒せしめて、音樂の大家たるに至らしめ、リンナスの父が、其の兒の臥床を飾るに、常に花卉を以てせるは、異日遂に彼をして、其の生涯を植物學の爲めに捧げしむるに至れり。勿論、天才なるものは、偶然の機會と事情とのみに依りて養成することを得るものに非ず。然れども、内に深く沈靜睡眠せる才能が、無意の刺戟に接觸し、一朝にして、覺醒活動を始め、終に偉大なる發展を遂ぐるに至りたるが如き事例は、決して少きに非ざるなり。

かくて、彼の一家は、生活上、大節約を行ふべき必要に迫られ、日用の蔬菜果物等の食料を買ひ入るゝにも、或は數回市場に往復して、なるべく廉價の物を選び、或は將に市場の閉鎖せられんとする時刻を窺ひて、其の殘存物を購入する等、僅々數錢の節約の爲めにも、

多大の勞力を厭ふを得ざるに至れり。況して衣服の如きは、兄妹共に各一枚の晴着を有せるのみなりしを以て、容易に之を着するを許されず。又之を着したる時に於ては、遊戯運動を禁止せられ、一旦外出を終りて家門に入るときは、直に之を脱ぎて常服に替へしめられ、又たとひ常服にても、少しく戸外の遊戯に耽るときは、直に室内に呼び籠められて、衣服と靴との保存に注意を與へられしと云ふ。さらでだに、彼は身體尪弱にして、天性敏感なるに、常に家庭の内部にのみ閉ぢ籠められて、朋友と交遊することなく、少年の生命たる運動遊戯にさへも遠ざかれり。かくて、日夕相接するところのものは、其の慈母と下婢とのみにして、彼の周圍には、全く男性的の剛健なる勢力を缺きたり。彼自から謂つて曰く、

「余の無力と纖弱とは、天性より來れるに非ずして、實に煖爐の背

後より起れるものなり」と。誠に彼をして溫和親愛、信任同情、率直靜穩等の氣分に富ましめたるも、而して又勇敢剛毅、思慮分別及活潑々地なる氣力に乏しからしめたるも、其の原因實に薄幸なりし家庭に在ること多し。されば、彼は平穩なる家庭に於て、獨り精神的活動を樂み、嘗て社會の風波に接したることなかりしを以て、常に温き家庭を通して、冷酷なる社會を見、世界をば、皆かくの如くなるべしと判斷し、慈愛深き己の母を推して、他人を見、人は皆かくの如くなるべしと信賴したり。而して、この社會觀は、實に彼の全生涯を通じて動かざるものとなれり。

嘗て彼の門下に學べる獨逸の教育史家ラウメル(L. V. Raumer)は、彼と「ルッソー」の少時を比較し、「ルッソー」は、夙く其の母を失ひ、父は又偏窟にして、彼を愛育せざりしを以て、彼は幼時より冷酷なる他人

の間に成長せざるを得ざりしも、之に反して、ペスタロッチは、夙く父を失ひたれども、其の母は慈愛に富み、而かも忠實敬虔なる下婢「バベリー」の愛護を受けたり。見よ、此の二大人物の家庭に於て受けたる幼時の第一印象が如何に其の全人格に大なる影響を及ぼしたるかを。ペスタロッチの全生活を貫ける基調 Grundton は、實に愛情にして、彼が大に家庭に於ける母親の位置を尊重し、又大に家庭の教育的價値を稱揚したるも、一に母親育ちの秘藏兒たりし彼の純潔なる信念より發したるに非ざるはなし。之に反して、ルッソーは曾て父母の愛情を味はず、又神聖なる家庭の養護を被らざりしを以て、家庭の價値を認むること少く、自から其の數兒を養育院に投じて顧みず、又其の名著エミールに於ても、主人公をして、温き家庭の愛護を受けしめんとせず、却つて、夙く彼を父母の代理者

たる、冷酷なる家庭教師の手中に委して、養育するに至らしめたるなり」と論述せるが、誠に味ふべき言なりと云ふべし。

**二、少年時代** 抑當年に於ける(一七五〇—一七七〇頃)チューリッヒの小學校には、二個年課程の家庭學校 Hauschule (讀方書方宗教)と、三個年課程の國語學校 Deutsche Schule (男兒の收容す)を含み、而して、更に上級の専門學校(課程七個年)に連絡せり。彼が郷里の小學校に在學したる幼年時代に在りては、概して想像的感情的の學科を好み、器械的に模倣し、記憶することを要する學科は大に之を嫌ひ、就中、習字の如きは最も拙劣なりしと云ふ。其の他、或學科に於ても、重要な部分は敏速精確に學習したれども、形式を要する如き學科に至りては、何等の興味を起さず、殆ど無頓着に經過したり。従つて、同一學科に於ても、或部分の成績は優良にして、遙かに學友を凌駕したれ

性行

ども、他の部分に於ては、甚だしく劣等にして、均等の成績を得ざりしと云ふ。

其の他、彼は幼時より容貌奇怪、行動態度不器用、不活潑にして、己の興味を惹かざる事柄に就ては、たとひ重要なる事柄にても、全く不注意、無頓着に経過したり。性質、又怯懦、柔弱にして、不潔を意に介せざりしを以て、一般に、學友より輕蔑せられ、殊に年長にして、強壯、狡猾なる者よりは、常に嘲笑、譏弄の材料に供せられ、馬鹿者の偏窟ハイツリ、Heiri Wunderli von Thorlikon. の異名を附せられて、常に惡戯の對象となるを免れざりき。然れども、彼は、生來、素朴、單純、順良、正直なりしが故に、毫も惡意に之を解して憤恚したることなかりしを以て、却つて、多くの學友よりは、輕蔑せられながらも、他の半面に於ては、弱者として愛憐せらるるを得たり。

品行上に於ては、彼は、概して、最も善良なる一人なりしが、時としては、又、其の無思慮、無頓着よりして、最惡の生徒も、嘗て犯したることなき過失を演じたることなきにあらず。是を以て、學友は彼を無能と評し、教師は彼を愚物と斷定することに於て、殆ど一致したり。彼自から往時を回想して、語りて曰く、

『少年時代の余の性格は、殆ど感情に依りて支配せられ、單に瞬間の印象の爲めに動かさるゝこと屢なりき。余は、常に倉卒に行動して、全く反省と思慮とを缺き、平常、母の居間より世界を眺め、現實の社會に就きては、全く何事も知ることなかりき。余は、世人を以て、皆自己の如き、好人物にして、信賴すべきものなりと信じ、他人が己に加ふる惡戯も、其の人が現實に之を行ひつゝあることを實見し、且つ自から之れが爲めに、甚だしく苦める時の外は、決して、其の

悪戯の嫌ふべきものなることを感知せざりき」と。是れ、實に彼の性格に關する正直なる告白なり。彼は、少壯時代のみならず、晩年に至るまで、全く此の如き輪廓の好人物なりしなり。思ふに、當時の小學校にして、單に知識技能の傳達のみを以て能事とすることなく、兒童の性向個性の如何を考察して、能く之に適する訓育體育を施し、心情の陶冶、缺陷の矯正に努力することあらんか、天稟の美質、彼の如き良璞は、恐らくは、更に偉大なる發展を遂げ、陸離たる光彩を發揮し、人道に貢獻したること、更に莫大なるものありしならん。惜い哉、當年に於ける小學校は、偏に知識技能の末にのみ走り、眞の教育を施し、兒童の全人格の陶冶を期するが如きは、全く思ひ及ばざりしところなりき。而して、是れ、實に彼の終生の運命と離るべからざる關係を有せるなり。

當時、彼の祖父、アンドリュウは、九十歳の高齡に達し、尙、チュリッヒを距る三哩の、ホエングの小邑に牧師たりき。此の地は、小丘上に在りて、リマツト河に臨み、風光頗る雄大なり。彼は、九歳の頃より、休日を以て、時々此の地に祖父を見舞ひ、又、毎年夏期に至れば、數週間此に滯留するを常とせり。アンドリュウは、博愛、仁慈、高潔の性格を有する良牧師にして、熱心に管内の小學校を監督し、下層社會の精神的、道德的改善に努力して、大に民心の歸服を得たり。然れば、彼は、祖父を見舞ふ毎に、其の雄大なる天然の美景に打たると共に、又、閑靜にして、嚴肅なる祖父の事業を觀察し、徐ろに敬虔の念を生じ、將來祖父に繼ぎて、神聖なる業務に従事せんと希望するに至れり。加之、彼の祖父は、附近に於ける眞率、素朴なる下層社會の兒童と、彼の接近し、交遊するを妨げざりしを以て、彼は己に「偏屈」「愚物」の惡名



を附せし、チユリッヒの良家の子弟に交るよりも、彼等に接して却つて愉快を感じ、故郷に在るよりも遙かに幸福に生活するを得たり。而して、又祖父を通じて、都會に於ける地主資本家等が、諸種の事業を村落に擴張し經營するに當り、其の奢侈驕慢横暴等が、漸次に、素朴なる地方民の道德的・身體的墮落を來す因をなし、輕薄・虛言・不正・冷酷の風漸く醸成されつゝあるを知り、所謂「凡ての害惡は都市より來る」*Omne malum ex urbe*との俚諺の眞實を痛切に覺知したり。是れ、實に、他年彼をして、地方人民の爲に奮闘するに至らしめたる最も神聖なる最初の動機なり。

3 Raumer は「アンドリュウ」を母方の祖父なりと記せり。

## 第二章 青年時代

青年時代の教育——當時に於ける瑞西の狀勢——瑞西協會の活動——

「ルツソー」の感化——農業計畫

高等教育

一、青年時代の教育 一千七百五十四年、彼は、小學校の課程を終りたるを以て、更に豫備校たる拉丁學校に入學せり。然れども、此の學校に於ても、宗教問答・讀み書き・算術及拉丁・希臘語等を課して、彼の天性を抑壓するが如き傾向多かりしを以て、殆ど彼の好學心を満足せしむるに足らざりき。越えて七年、文科專門學校 *Collegium Humanitatis*に入學せしが、當時此の學校は、二年課程にして、語學・藝術・宗教へブリユ語の四部に分れ、更に高等專門學校 *Collegium Carolinum*に連絡せり。此の學校は、語學(一年)哲學(一年半)及神學(二年)の三課

程を有したるが、彼は文科専門學校を終り、千七百六十三年、此の高等専門學校の語學課程に入學せり。

4、5、Seyfarth. に據る。

抑、當時の「チューリッヒ」は、規模尙小にして、物質的方面に於ては、甚だ貧弱なりしと雖も、高等専門學校には、チムメルマン、グスネル、シュタインブリュッヘルの如き有数の學者、其の任に在り、文運の隆盛遙かに獨逸諸市を凌駕するものありき。就中、教授 ボドメル、Bodmer は、歴史及法律學、政治學を擔任し、嘗て當代獨逸の文豪 レッシング と文學上の論争をなし、名聲藉甚なり。教授 ブライチンゲル、Breitinger は、古語及哲學を講じ、其の著作に於て好評噴々たりしのみならず、學生を愛すること子の如くなりしを以て、彼等は又父の如く彼を尊敬せり。共に理想主義を奉ずる碩學にして、聲望遙かに柏林の

チューリッヒの文化

J. J. Bodmer. (1698-1783)  
J. J. Breitinger. (1701-1776)

チューリッヒの青年

諸學者を壓せり。特に ボドメル 教授は、清廉熱誠愛國の志士にして、自由獨立仁慈犧牲愛國を唱道し、奢侈を憎み、資財を輕んじ、あらゆる物質上の幸福を斥け、大に青年學生の志氣を鼓舞作興せり。是に於て、チーリッヒ の學生社會は、翕然として之に應じ、漸次に質朴剛健の氣風を馴致し、只麵包と野菜とを食して満足し、只管高遠なる理想を憧憬して、人生の榮華を顧みざるの概あるに至れり。然れども、又、他面に於ては、大希臘大羅馬の市民生活に關し、僅かに教室に於て收得したるに過ぎざる淺薄皮相の知識を以て、瑞西の小縣に市民たる生活準備に十分なりと妄信し、徒らに空想に走り、實際社會を輕視するが如き弊風を生じたり。

「ハスタロッチー」は、生來、想像力豊富にして、熱狂し易き天稟を有せしを以て、大に ボドメル 教授に傾倒し、嘗て愚物と評せられ、無能と

罵られたれども、今や大に修學の興味を感じ、一部の學科に就きては、優良なる成績を現はし、數回の選奨をさへ受くるに至れり。然るに、彼は不幸にして、最後の學年に於て、重き<sup>6</sup>疾病に罹り、醫師より今後の修學を禁ぜられたるを以て、千七百六十六年の初め、哲學部のみを學修し、神學部に入るを得ずして退學したり。

<sup>6</sup> Savdath. に據れば、恐くは「チフス」なりしなるべしと云ふ。

瑞西社會  
の頹廢

二、當時に於ける瑞西の狀勢 抑三十年戰爭以後より十八世紀の末葉に至る歐洲思想界の狀況を概觀すれば、道德、宗教、大に頹廢して、醜惡なる利己的思潮は、あらゆる社會に横溢せり。而して此の風潮は、自由の樂園、瑞西にも侵入し、當時十八の縣<sup>カントン</sup>、二十餘の自治體並立し、各特有の憲法及政治を有すれども、一般に人民を抑壓し、移轉の權利、産業の自由をも認むることなく、都市は各專制的の暴威

を振ひて、村落<sup>ランド</sup>を壓迫し、特に、チューリッヒ市が、縣内の村落に對する關係の如きは、殆ど暴君の奴隸に對する態度にして、其の專横驚くべきものあり。即ち、あらゆる名譽及利益の地位は、悉くチューリッヒ市民の獨占到歸し、教會の役員は勿論、行政、司法の諸員の如き、村落民は全く之に任ぜらるゝを得ず、加之、高等の諸學校も、市民の子弟のみを入學せしめ、村落の人民は、醫師を除くの外、全く其の子弟の入學を禁ぜられたり。其の他、有利なる工業も、市民の獨占するところにして、村落民は只直接自己に必要な一部の手工業のみを解放せられ、甚だしきは農民の父死することあれば、其の遺産たる土地の一部は、之を市に沒收するが如き、肉類、酒、葡萄又は他の果物も、或は市民の定むる價格に従ひ、或は市場に販賣する外、自由に賣買するを得ざるが如き、其の他農民は、五米以上の利子を以て、他に金

錢を貸すこと能はず、狩獵權を得ること能はず、自製の木綿すらも、自から晒し、自から染色するを禁ぜられ、市民の特權を與ふたるが如き、無道不法の甚だしきものありしを以て、村落民怨嗟の聲常に絶えず、之に加ふるに、市内に在りても、貧富の懸隔漸く大にして、名門富豪の族大に勢力を逞しくし、市内の小學校に於て、教師は、往々富家の贈遺を受けて、兒童の取扱を特別にし、貧家の子弟は、屢其の凌辱に泣かざる可からざる苦境に立てり。

三、瑞西協會の活動 是に於て、ポドメル教授は、青年學生を召集して、瑞西協會 Helvetische Gesellschaft. を組織し、國民の道德的・政治的・生活的の向上改進を期し、毎週一回相會して、歴史・政治・道德・教育等に關する論議を闘はし、特に「ルッソー」の著述に依る諸問題に及ぼしたり。「ラファートル」Lavater、「シュルテス」Schultheis、「ヘス」Hess、「トブラー」

Tobler. 等有爲の青年及後年倫敦に於て有名なる畫家となりし、フュッスリ H. Füssli. 等、會員となり、就中「ラファートル」最も有力にして其の會頭たり。世人此の會を呼んで愛國團と稱せり。當時ベスタロチーは、可憐なる村落民に對する愛情と、市民の專權を憤る熱情とより、ポドメル教授に従ひ、十五歳にして、夙く此の會員となり、大に政治的興味を惹起するに至れり。

7 Helvetien は瑞西の別名なり。協會の成立は、千七百六十年の初めに於て、常に柔皮匠組合の家に於て會合せるを以て、又「ゲルゲエ」Gruge (Gerwe. の瑞西協會)とも呼べり。

8 Johann Kaspar Lavater (1741-1802) 後、哲學者、詩人、文章家、說教者、となりて著名なりしが、佛軍の銃彈を受け、其の傷を疾みて死せり。

Hans H. Füssli. (1749-1832) 後、瑞西元老院の議員たり。

當時瑞西に於ては、夙に少年時代より國家の政治に關する教育

ホドメル  
教授の理  
想

を忽かにせず、又十二歳頃より、専門士官に依りて、軍事教育をも施したり。然れば、高等専門學校の學生が、政治的團體を組織し、教師も亦之に加盟せるが如きは、敢へて怪むを要せざりしなり。當時「ホドメル」教授は、其の人格的感化と愛國的鼓吹とに依り、「チューリッヒ」に於ける學生景仰の中心たりしが、其の政治的主張を概括すれば、勿論民主的にして、政府の要は祖國の幸福を圖り、人民の知見品位を高めんが爲めに、あらゆる努力を惜まざるに在りとなし、當年「チューリッヒ」市の舊式制度に反對し、斷然起つて國家改造の必要を唱道せり。かくて、屢、縣の小參事員「Kleiner Rat」に選ばれしも、其の黨與少數なりしを以て、未だ政界に重きをなすに足らざりき。然れども、彼は、青年學生の知見を練磨し、心情を陶冶して、將來に於ける精神的、道德的の理想社會の實現を期し、教育の本領は、個人を道德的

に教養するに在るものにして、教育學は畢竟又政治學なり」と云ひ、國民生活の改善は、眞に百年を期して其の目的を達すべきものと稱したり。

9 當時の各縣には、大參事員、小參事員あり。大參事員は其の員數二百人、小參事員は二十五人より、市民の選舉に依りて、其の權利を代表したり。

少年政治  
家の活動

少年瑞西協會員は、いづれも、皆、其の師の民主的思想に共鳴して起てるものなるを以て、少數なる貴族富豪アリストクラシーの一派に反對し、特に當時の官吏及教會員の腐敗を攻撃せるが、彼等が結束して、其の第一矢を放つに至りたる對者を代官「グレイベル」Landvogt, Greibel、とす。彼は當時の制度に依り、行政司法の兩權を手中に掌握せるを機とし、六年の在職中、不法に人民を抑壓し、財物を劫掠したること少か

らず。是に於て「ラファートル」及「フュッスリ」等は、彼の劫掠物を返還せしめんとせるも、之に應ぜざりしを以て、遂に彼の不法を弾劾し、攻撃的印刷物を内外に頒布せり。事件は、今や重大となり、政府は之を法廷に公にせざるを得ざるに至り、千七百六十三年、前代官「グレイベル」は、審理の後、處刑せられたるも、「ラファートル」及「フュッスリ」の二人も、亦自己に關係なき事件を論議したる件を以て、恰かも有罪者の如く取扱はれ、謝罪せざるを得ざるに至れり。次ぎて、此の青年愛國團の一人は、「チューリッヒ」の參事員にして、某組合長たる「ブルンナ」の不法行爲を摘發し、或者は、又、牧師「ホッチンゲル」、或者は、代官「エルンスト」兄弟の非行を弾劾したるが、此時に際し、「ベスタロツチ」及他の青年愛國團員等は、いづれも皆之に干與し、平地に波瀾を起さしめたるものとして、官憲の嫉視するところとなれり。偶、千七百六

十二年、佛國議院は、「ルッソー」の傑作「エミール」に對し、有罪宣告を爲し、其の書を焼かしめたるが、當時、東隣の小縣「ジュネーヴ」に於ては、寧ろ「ルッソー」に同情の議論盛なりしかば、佛國は脅迫的態度に出で、「ベルン」及「チューリッヒ」に、「ジュネーヴ」出兵を要求せり。是に於て、「ジュネーヴ」は、同國內の友誼を以て、仲裁を「チューリッヒ」に求めたり。所謂「ジュネーヴ」事件なるもの是れなり。時に、神學講師「ミューラー」なるもの、農民の會話と題する諷刺文を草して、出兵の風評を非難し、市中に頒布したり。官憲は、其の趣旨卑陋にして、故意に祖國の没落頹廢を希圖せるものなりとし、委員を擧げて筆者を調査し、漸く判明するに至りしかば、「ミューラー」は、禍の及ばんことを恐れ、伯林に逃走せり。是に於て、官憲は彼の牧師候補者たるを免じ、瑞西居住を永久に禁止し、尙瑞西會員等が其の連累者に非ざるやを疑ひ、悉く召喚して

審理を遂げたるに、何等の證據なかりしにも拘らず、多数の會員に罰金を課し、特に「ベスタロッチ」を拘禁三日に處したる後、嚴重なる警告を與へて放免したり。然れども、青年愛國團の熱心は、毫も減退することなく、更に文筆を以て社會の狀態を改善せんと欲し、千七百六十五年、相圖りて「警告者」Der Erinnerer. と題する地方新聞を刊行する計畫を立て、特に政治問題のみを論ぜざる條件を附して、官憲の許可を受けたり。而して、我が「ベスタロッチ」は、其の重要な少年記者たりき。

**四、ルツツの感化** 時方に、文豪ルツツの「エミール」及「民約論」が、歐洲の思想界を震撼したる際なりしかば、彼等青年愛國者は、皆之を愛讀せしが、就中、ベスタロッチは、「エミール」を讀みて大に感奮し、人類救済の凡てを盡せるものなりとし、之に依りて、自己の家庭及學校

ルツツの感化

に於て受けたる教育と、エミールの教育とを比較考察して改良の餘地甚だ大なるを知り、又、嘗て、深く感得せし都鄙文化の懸隔大にして、地方の下層民が、貴族的專制の下に呻吟するを慨し、一般國民の自由と幸福とを増進するは、實に刻下の急務なりとなし、而して、之が爲めには、益、法律及行政の研究を努め、以て市政及地方改良の實を擧げざる可からずと信じたり。

是より先、彼は牧師たらんと志し、生涯を神に捧ぐるの目的を以て、最も神學の研究に熱心したり。蓋し牧師の職は、國民の道德的、知力的向上を策するに適し、年來の彼の社會改善の希圖に合するのみならず、彼の最も敬愛したる祖父の好模範は、彼に甚大なる感化を與へたりしなり。然れども、若し彼にして、其の最初の宿志を遂げて、牧師たりしとせば、彼は、決して當年の神學に満足するを得

神學研究の志望

ざりしなるべし。何となれば、當時の皮相淺薄なる合理主義は云ふまでもなく、頑冥なる正教派も、感情過重の敬虔主義も、決して彼の熱烈深遠なる心情を満足せしむるに足らざればなり。然れども、彼は中途にして神學部を去り、其の所志を變ずるに至りしを以て、後年却つて内心の大煩悶大苦惱に會するが如き不幸を免れた。ザイファルト曰く「彼の傳記記者は、彼の牧師たらんと志せし第一目的の變更を以て、彼が第一回説教の失敗に因るとなす者多し」と雖も、實は何等の證據なきのみならず、たとひ彼は祖父の感化影響を蒙ること大なりしと雖も、當時只聖書を愛讀せるのみにて、未だ神學部の課程をも終らざる僅かに十九歳の青年學生たりしに過ぎざるなり。然るに、果して講壇に立ちて、公衆に説教を爲したるべきや否やは、尙大に疑の存するところなり」と。

思ふに、彼が神學研究の志望より、一朝其の所志を變更するに至りたるは、實にルッソーの影響に因るものにして、彼の熱烈にして、空想に富める直にルッソーの理想を己の郷土に於て實現せんことを期し、特に其の理想的自由制度に依りて、社會を改善せんことを企圖したり。彼は當年既に、叔父なる醫士、ホッツが「リヒター・シュヴァイル」に於て「ベゼドゥ主義の小學校の建設に助力せるに對し、種々の建策を爲し、屢々其の商議に參したるを以て見れば、夙に教育に留意する所ありしを知るに足るべしと雖も、彼の眞意は、實に教育改良の狹隘なる範圍のみに止らずして、實に國民の社會的、政治的狀態の改善向上に在りしなり。彼は、自から其の晩年の著「白鳥の歌」に叙して曰く「當時の少年たる余の胸中には、國民に大なる幸福を齎らすべき夢想的努勉のみ愈々高まり、特に、自己の誕生市たる「チューリッ



ヒに於て、必要且つ可能な事業を爲さんが爲めには、嘗て自から選擇し決定せる宗教的位置を放擲し、新に政治・法律の研究に依りて、新生命を開拓せんとするの念、勃然として萌し、而して、そは早晩郷土の市民及祖國瑞西の狀勢にも、有効なる影響を與ふる機會并に方案を生ずるに適すべしと信じたり』と。而して、彼が其の衷心より企圖したるものは、下層民の指導・救済にして、之が爲めには、先づ辯護士たるを以て最も至便なるべしと信じたり。

然るに當時彼の在學せし高等専門學校には、法律研究の施設なかりしが故に、彼は其の疾病に罹りし機會を以て退學し、獨學にて法學を研究せり。然して、他面に於て、彼は尙當年の學友と友誼を繼續せしが、特に、かの瑞西協會員たる青年愛國者の一團よりは、大なる愛顧と尊敬とを被ふるに至れり。就中、稍年長なる、ラ、フ、ア、テ

ル、フ、ツ、ス、リ等とは、親密なる交際を維持し、又牧師候補者たりし、ブルンチュリ、K. Bluntzliとは、最も親交を保ちたり。其の他、當年彼の相交りし人物中には、後年、チューリッヒの有名なる宣教師となりし、クラウゼル、Krause、後年、彼の妻となりし人の弟にして、キンテルツルの牧師となれる、シュルテッス、H. G. Schultess等あり。知名の士甚だ多くして、社交上より有益なる感化を受け、併せて又、學術の研究上にも、利するところ少からざりしが如し。

10「ザイファルト」に依れば、當年、彼の法律研究上の「ノート」及拔萃等は、今尙「チューリッヒ」の圖書館に存し、其の他、彼の法律研究に努力せしことを、證すべき數多の文書存在すと云ふ。

**五、農業計畫** 然るに、彼は、其の後に至り、法學の研究を繼續するを得ず、中途にして、再び進路を變更するに至れり。其の原因の主要

なるものは、既に記したる如く、當時彼が疾病に罹りて、病後の健康宜しからざりしと、彼の過去に於ける經歷が深く官憲の嫉視を被ふり、到底、チューリヒ市に於いて、其の位置を得ざるべきことを察知したるとに因れり。而して尙彼をして、其の宿志を變更せしむるに與つて力ありし最近の動機は、大に田園生活を高調し、自然を取扱ふ農業を以て、自由と冥想とを妨げざる理想的職業なりとせる時代風潮にして、特に「ヒルツェル」<sup>11</sup> Hitzel の重農主義と、ルッソーの自由思想とは最も大なる感化を彼に及ぼしたり。ルッソーが瑞西協會員にして、ベスタロッチーの友なる、シュルテッスと會見するや、大に地方農業者の自然的生活を賞揚して、最も幸福なるものとなせり。思ふに農業は自由の郷土にして、工業は奴隸の國なり、吾人は農業に依りて静閑なる家庭生活を送り、併せて又高雅なる感情を養ふこ

## 重農思潮

とを得べしとは、實に當代有かなる自然高調論の思潮なり。是に於て、幻想的なる彼は、忽ち心機一轉して、農業者の自然生活を嘆美し、漸く其の方向に向はんとせしが、突然不幸なる事件の發生は、彼をして急に其の新決心の實行に着手せしむるに至れり。

11、Hitzel は當時「哲學的農夫の家政」と題する著作を出版して好評を博し、數ヶ國語に翻譯せられたり。

所謂不幸なる事件とは、彼が親友中の親友たりし、カスパー、ブルンチュリの死是れなり。元來、ベスタロッチーは、天性敏感の人なりしと雖も、自から省みて、己の偏屈淺慮なることを知るが故に、深く此の才學超群なる畏友、ブルンチュリと相親み、之が提撕を期待したるに、不幸にして彼は肺を病みて夭折せり。其の死に臨むや、彼は己の病床に、ベスタロッチーを招きて、其の法學研究の志望を抛ち、他の

## 親友の死

平穩閑靜なる職業を選ぶの得策なるを告げ、能く社會生活の關係を理解し、常に冷靜なる判断を運ぐらすべき忠實なる良友を得るに非ざれば、復び又此の如き志望を起すこと勿れと忠告したり。

「メスタロッチ」は、衷心より深く親友の痛切なる忠言に感泣したるが、千七百六十七年五月、此の薄命の俊才終に逝きたる時、彼は泣いて其の遺骸に近接し、「ラファエル」が、強ひて之を去らしむるまで、其の棺側を離れざりしと云ふ。

幾もなくして、彼も亦、<sup>12</sup>疾病に罹りしが、醫師は勉學を廢し、閑靜なる地方に轉居すべしと勸告せるを以て、今や、彼は、斷然故郷の地を去らんと決心し、質朴なる農民の間に伍し、農事に努むるは、却つて自然を樂み、併せて、地方民の教化を爲すことを得る所以なりと信じ、此に、全く年來の志望たりし法學研究を放棄し、其の研究物を燒

欠

# 欠

彼の家族に、苦痛と耻辱とを齎らすに過ぎざるべしと。彼も亦、自から記して、今や平和にして閑静なるべき家庭生活を中心とする、余が仁愛的活動の希圖は、全く夢の如く消散したりと云へり。

## 第四章 教育事業の着手

新思想の開展——ノイホーフの開放——貧兒の收容教育——事業の擴張——  
貧民の悪計——事業の失敗——一婦人の來援

新思想の開展

一、新思想の開展 抑、青春時代に於ては、何人も一時熱烈なる血氣、幻想に驅られて、空漠たる事業に狂奔することなきにあらず。曩に、彼が政治問題に奔走し、次に、農事の改良社會の改善に熱中したるが如きは、其の動機皆此に出でざるはなし。然るに、此等の事業皆失敗に歸するや、彼は、此に内省に向ひたるが、偶、彼の長子、ヤコビ

の誕生するあり。彼は、こゝに、父として養育教養の義務責任の大なるを考へ、自己の新位置を完うすべく、深甚なる自覺を生ずるに至り、更に過去に於ける物質的、事業の失敗に鑑み、翻然として、或は悔い、或は耻ぢ、始めて宗教的に反省し、道徳的に復活して、自己の天才能の向ふところの新生命に入らんと決心せり。是より先、彼は農事の多忙と處世上の困難とを犯して奮闘の傍ら、千七百七十四年の一月頃(誕生三)より、自からヤコビの成長日記を録して、前人の未だ曾て試みざりし、兒童研究を己の愛子に就きて試み、主として「ルッソー」の見解に従ひ、其の教育法を考案したり。

彼は又、幼時、祖父の許に在りて、親しく貧民救済の事業を觀察し、深く下層社會に同情を有したるが、後年に至り、屢村落に於て、小学校の門前に群集せる貧民子弟を見るに、其の肉落ち頰瘠せ、發育不

貧兒の救濟

良にして、身體的に憐むべきものあるに拘らず、其の眸子、眼光の明かにして、無垢無邪氣なるは、なほ、人類の善良なる天性を確保するものなるに、漸次、父兄の惡徳、社會の惡習に感染して、或は窃盜、鬭争等の不良なる行動を事とし、遂に社會の擯斥を受け、囹圄に繋がるに至る者少からざるを知り、彼等の少年時代に於て之を救済し、教育するの急務なる事を痛切に感知したり。而して、又、彼は下婢「バベリー」の實例に依りて、下層人民にも高尚なる精神の存するあるを確信し、「ヤコビ」の父としての經驗より、彼等を教育すべき方案を考へ、之が實行に着手せんとせり。然るに、親戚中には之に反對するものあり。義弟カスパードの如きも、自己及自己の家族の扶養に努力せざる可からざる秋に方り、他人の兒童の養育を擔任せんとするが如きは、愚の極なりと切言したるにも拘らず、知友「ラファ

「テル」フユツスリ其の他富豪の援助を受け、千七百七十四年の冬、彼は斷然附近に於ける貧民、浮浪者、乞食の子弟十數人を收容したり、彼以爲らく「貧民救済の慈善的設營に於て、毫も彼等を勞せしむることなく、自から耕さざる食物を興へ、自から紡がざる衣服を着けしむることは、却つて懶惰放逸に陥らしむる虞多し。故に、眞の改善の手段は、彼等をして、農業、手工に従ひ、先づ勞作の價值を知らしめ、之と共に、其の知力を修練して、自己の要求を充たし、社會に寄與するを得る能力を陶冶し、而して、又徳性を涵養して、吾人々類は、上帝の模寫として誕生し、上帝の愛子として生存するものなれば、たとひ貧窮に生活すとも、大なる恩寵を享有するものなることを知らしめ、却つて其の器に非ずして高位幸運に居る者よりも、幸福なる事を悟らしむべきなり」と。かくて、彼は己の住宅農場、庭園の全

部を擧げて、此の博愛的施設、社會改良の模範的中心地たらしめんことを期し、悉く彼等に衣食を給し、己の家屋に住して、夏季には共に耕作、勞働に従ひ、冬季又は雨雪の日には、別に紡績を授け、而して、又之と共に、其の會話の間に、知能を磨き、信仰を固うせんと欲し、別に午後又は夜間に於て、讀み書き及聖書の文章中の暗誦を課したり。然るに、數月にして、兒童の身體は強壯となり、顔色は快活、正直、伶俐の相を現はし、愉快に勞作をなすと共に、又學業にも努力せるを以て、其の進歩見るべきものありき。蓋し、彼の事業は、多年彼が理想としたる、村落に於ける下層民の能力を啓發し、依りて、以て自立自助の位置に到達せしめんとせるものにして、彼は、人類は只教育に依りて市民的位階能力を得、活力ある一員として社會の合同生活に入ることを得、併せて又其の精神の陶冶、心情の修養に努力

することに於て、愉快と自由とを樂むことを得るものなりとの信條の上に立てり。彼は實に此の信條と神の如き愛情とに驅られて、貧民兒童の教育者となり、愛護者となり、又父たらんことを期したるなり。従つて、彼の事業は、社會的政治的にして單純なる教育事業のみに止らず。是を以て、一方に於ては、或は彼の事業を危険視するものなきにあらざりしも、他方に於ては、彼の事業と成績とは、漸く遠近に聞え、嘆賞の聲噴々たりき。然れども、如何せん、兒童の勞働力は甚だ僅少なるを以て、稍困難なる耕作には堪ふることは、能はず、諸種の費用、従つて多額に上りたるが故に、彼は異常の節約を行ひ、殆ど一片の黒麵粉と水とのみを以て、晝食を凌がざるを得ざる窮境に瀕したり。

二、事業の擴張 偶々ペスタロッチーは<sup>19</sup>イゼリン Iselin 及「ターナー」Teal-

Turner の二友人より大なる助力を得たり。<sup>20</sup>「ターナー」は「チューリッヒ」の代官にして、貧兒教育に關する熱心家なりしを以て、同情に富める十七通の公開狀を發し、大に彼の事業を賛し、各地に彼を紹介せり。「イゼリン」は「バーゼル」の市會書記にして、政治・經濟に通じ、ルッソーの愛讀者たり。當時、自から週刊雜誌「エフエメリデン」Ephemeriden を發行せしが、ペスタロッチーを「教育界に於ける霸王」と題して紹介し、尙彼の論文及其の人道的事業の完成の爲めに、彼が世の慈善家に訴ふる文章をも、之に掲載して、廣く公衆の贊助を求めしめたり。是に於て、ベルン「チューリッヒ」「バーゼル」「キントレル」の各地より、篤志者の義金續々として集まり、其の額一千四百フランの多きに達したり。

61 Isak Iselin. バーセルの人 (1728—82)

20 Tschammar, チューリッヒの人 (1761-1825)

是に於て、彼は事業を擴張して、三十餘人(一七七七年九月の報告に依れば三十人)の貧兒を收容し、數人の教師を聘して(一七七八年の報告に依れば)奮闘せり。固より、彼等貧兒の間にも、或は勤勉柔順、正直敏捷なる「ヘチーゲル」姉妹の如きあり。善良にして、能く織り能く書ける「ルドルフ」の如きあり。溫和にして、信仰心堅固なる「ルヂ」の如き者なきに非ざりしと雖も、元來、最下層社會の子弟にして、多くは浮浪、乞食の生活を送り來れる者なるを以て、殆ど怠惰放縱、不信猜忌、貪食、亂雜、狡猾、虚偽等の如き、不良の性質を有せざる者なく、従つて、厭ふべき悪行を試みて平然たる者多し。就中、ヤコビ、リスベス、及、フォグ、姉妹、ヘルト、姉妹の如きは、皆乞食の徒にして、ノイホーフに來りし時は、榮養の缺乏より衰弱の極に陥り、殆ど歩行にさへも堪ふる

彼の奮闘

能はず、而して懶惰、放心、無思慮、不規律にして、其の感化頗る困難なりしが、彼の熱誠なる養育教訓に依り、大に心身の健康を回復し、僅々一二年にして、知識技能、道德の上に少からざる改進を來したり。かくて、當初に於ては、彼の熱誠努力、世人に認められしを以て、來りて收容を乞ふ者漸く多く、終に其數六七十名に上るに至れり。然るに、不運は常に彼を見舞ひ、一回の凶作と二回の降雹とありて、地方の農作物を害したること甚だしく、従つて兒童數の増加と共に、日用品の暴騰は、彼の財政を大に困難ならしめたるを以て、彼は極度の節約と勤勞とを以て益、奮闘せり。彼が、此の間に於ける忍耐、勤勞、愛情は、實に非常にして、先づ兒童を入浴せしめて、其の身體の不潔物を除き、襤褸を脱して新衣を着せしめ、且つ彼等に與ふるに、最良の食事と十分の睡眠とを以てし、自から弊衣を着け、塵垢を



被ふり、最悪の馬鈴薯を食ひて、朝には最も早く、夕には最も遅くして、毫も倦色あることなかりき。彼自から曰く、余はこの數年の間、五十人の小乞食の内に、生活し、彼等と衣食を頼ち、せめて人らしく生活するの途を、彼等に教へんが爲めに、余自身は、全く乞食の如く生活せりと。

**三、地方民の悪計と彼の失敗** 然るに、當時、地方民は貧困、腐敗、墮落

の極度に達したるを以て、貧兒は續々として來集し、彼の養育を受くる者八十名の多きに達せり。而して、多數の兒童中には、不良の性質を有する者少からず、或は遊惰、漂浪の習慣をなし、或は不潔、亂雜を意とせずして、漸く教訓、指導に従はざるものあり。是等の徒は、常に些少の勞働、手工をも嫌忌し、清潔、整頓を厭ひ、課業を惡み、往々、不滿、謀反の念を藏したるが、新調の衣服を着くるに及び、相携へ

貧民の惡意

て竊かに逃走せり。而して、廉耻の何たるを知らざる貧民等は、屢「ノイホーフ」に來り、或は兒童に面會して、其の食物、勞役の如何及歸宅の意志等を問ひて、彼等を教唆し、或は取扱の不良を述べて、兒童の勞働に對する報酬を要求し、脅喝するが如き者絶えず、或は又虚構の事業を構成して、彼の事業を助成しつゝある資産家に報告する者さへあるに至り、日曜日には、此の種の父兄、彼の農園に來集して、殆ど煩に堪へず。是を以て、彼の事業に對する、社會の信用漸く減じ、從つて、義捐金到らず、財政大に窮乏せり。然れども、彼は愛妻の内助と慰安とを恃み、病を犯し、精力を勵まして、努力する事二年に及びしも、當時の官憲は、何等彼を保護することなかりしを以て、千七百八十年の春に至り、資金全く竭き、彼等夫妻が、其餘財を傾け、全力を盡したる、尊むべき此の社會的事業は、再び失敗に歸し、全

フイホ  
の閉鎖

く閉鎖せざるを得ざるに至れり。創立より此に至るまで前後七年、熱狂なる彼は、最後の一錢に至るまで、全く此の事業の爲めに費したるを以て、嘗て彼が同情愛憐に堪へざりし、漂浪乞食の徒と同じく、今や彼自からも、資本家の仁慈に依りて残されたる、僅々一二英町の畑地と家屋との外、何物をも有せざる憐むべき、一個の貧民となり、了り食物なく、薪炭なくして、寒氣と飢餓とに暴露せらるゝに至れり。之に加ふるに、アンナは甚だしく健康を害して、病床に横はり、家政を親からするを得ず、彼も亦失望落膽甚だしく、心身共に疲憊して、茫然自失せるものゝ如くなりき。佛人ギムブスは、後約九十年を経て、千八百六十九年、フイホーフの舊址を見舞ひたるに、全く鐵道より離れて、旅行家にも知られざりし此の地方も、既に全く耕耘せられ、人民も亦勤勉にして、安樂なるが如く、途上一人の

乞食を見ざりしと云ふ。彼は尙其の記事に附加して曰く「村中には善良なる小學校を有したり。當時、メスタロッチーは、かれが如き、苦き失敗の經驗を嘗めたりと雖も、爾來彼の理想と主義とは、漸次に教育界を風靡し、遂に地方に此の良結果を現はすに至れるものか、世に偉人歿して其の墓地肥ゆ」と云へるもの、蓋し此の類か。然りと雖も、若し夫れ當時の社會にして、彼の精神を諒とし、其の事業に感謝するあらば、彼は尙満足すべしと雖も、無知無感にして、利己主義享樂主義にのみ耽溺せる當時の社會に在りては、却つて冷笑嘲罵を以て彼に酬い、彼が村落又は市街を歩行するや、人民は肩を聳やかして、

『憐むべき意氣地なしよ、彼は日傭人より己の無知なるを知らず、却つて他人を救濟せんことを圖りたり』

と私語し、多数の友人中には、彼の心事を憐みたる者なきに非ざりしと雖も、敢へて彼を激勵し、援助せんと欲する者なく、彼に會して、其の不幸を慰藉するをさへ慵しとして、なるべく彼に面會せざらんことを勉め、其の親友間に於てさへ、彼を以て、遠からずして、養老院又は瘋癲院に入りて、其の餘命を終らざるべからざる不幸なる人物なり」と評するに至り、彼と、尙舊時の温き親交を保ち、同情を有して、常に勸告奨励を繼續せるものは、僅かに、フュッスリ「イゼリン」の二人ありしのみ。只内には、彼の病弱なる愛妻ありて、常に彼を慰め、毫も自家の窮乏につきて憤懣し愁訴するが如きことなかりしは、彼の爲めには、實に不幸中の幸なりしと雖も、彼は、又富有と幸運との間にのみ成長したる彼女の今昔を考へて、却つて同情の涙に咽びたり。然るに、此の危急の秋に方り、一身を挺して犠牲となし、

此の博愛教育家の爲めに、滿腔の熱誠を以て助力せんことを望みたる者あり。而して、そは富豪の徒に非ず、政界の先覺者に非ず、教界の職司に在る者に非ずして、渺たる未知未見の一貧婢なりしは、驚異すべき事實に非ずや。

婦人、名をエリザベツ、ネー、フ、Elizabeth Nief. と呼び「カッペル」地方の人にして、「チューリッヒ」の市民権を有する者の家族なり。家素と富有ならざるを以て、良好なる教育を受けず、親戚なる一家に仕へたりしが、偶、ノイホーフに於ける「ハスタロッター」の事業を聞き、大に感奮し、特に、今や其の慘憺たる境遇に沈淪しつゝあるを聞き、奮然起つて彼を救護せんと欲し、自から、ノイホーフに急行し來りて、其の志望を申し出でたり。然れども、彼は、自家不幸の渦中に他人を投ずるを欲せざりしと共に、彼女との宗教上の相違は、交際の圓滿

を期し難きを憂へ、説くに女性の採るべき職業を以てし、固く之を辭したり。然れども、彼女の義侠心は、鐵の如く強固にして、到底之を翻へすべからざるを知るや、欣然として、彼女に

『よし、然らば汝の手を煩はさん。遠からずして、汝は、余が家にも神の住み給ふことを知るに至るべし』

と對へ、其の好意を謝したり。爾來、彼女は、ノイホーフに止り、彼の家政を整理して、大に荒廢せる一家の清潔秩序を回復したるのみならず、病弱なる彼の長子、ヤコビを看護し、又獨力を以て屋外の耕作に努力し、能く一家の薪水に窮乏を感ぜざらしめたり。其の義侠、勇敢、賢明、勤勉、敬虔、溫和の性格は、實に婦人の好模範と稱するに足るべく、彼が晩年に至るまで、彼女を崇拜し、友人門弟に、彼女の美德を稱揚し、其の恩誼を感謝して止まざりしも故ありと云ふべし。

彼の門人、ニコロヴウスの説に依れば、彼の名著、リンハルド、ウント、ゲルト、ルドに描き出したる賢妻、ゲルト、ルドの性格は、全く其の模範を、彼女に求めたるものなりと云ふ。かくて、彼女は、ペスタロッチ一家に在ること十餘年の永きに互り、後千八百一年、彼の學徒にして最舊の門人なる「クルジ」と結婚せり。

思ふに、ノイホーフに於ける彼の失敗は、其の前半生に於ける最も悲惨なる失敗にして、殆ど回復すべからざるものなりしと雖も、而かも彼をして、其の理想と性格とを表現すべき絶好の機會を捕へ、而して教育事業の内に、始めて自己を發見せしめたるなり。彼自から曰く、余の事業は失敗に歸し、余は赤貧に陥りたり。然れども余は之に依りて、新に經驗を積み、大に精神的財産を得たり」と。實に彼は、爾來、全生涯を通じて、ノイホーフ事業を繼續し、延長し、發

展し、遂行したるものと云ふべく、又彼の生命は、ノイホーフに於て、始めて己の趣向に適し、教育上、社會改良上最も意味ある端緒に就きたるものなり。而して、又歐大陸中に於ける貧弱なる一小農場、ノイホーフは、彼の名に依りて、文化史上、教育史上、始めて不朽の名聲を贏ち得たるものなり。

21 Krusiの人物と事業とは更に後章に詳記す。

## 第五章 著作時代

「イゼリン」の勸告——「隱者の夕暮」の發表——不朽の傑作「ゲルトロード」の出版——其の他の著作——家庭の不幸——獨逸旅行——佛國革命

一、隱者の夕暮の發表 「ノイホーフ」に於ける彼の失敗は、實に慘憺を極めたりと雖も、彼の理想信念は、毫も之が爲めに挫折せること

なし。如何せん、今や、社會的地位の變動甚だしきを以て、彼をして、此の救済改良の事業に於て、捲土重來の再舉を策すること能はざらしめたり。然れども、彼の失敗は、彼自身の經歷、經驗に於て、決して價值なきものに非ざりしのみならず、又世界の普通教育の發展、人道事業の進歩の爲めにも、實に貴重なる階梯なりしなり。

此の時、彼の恩人にして知友なるイゼリンは、屢、彼を訪問して、彼の失望を慰めたるが、尙彼に勸告するに、其の實行せんとせる理想計畫を社會に公表すべきことを以てせり。然るに、彼の一家の財政も益、急迫を告げたるを以て、彼も亦奮然起つて、自から救はざる可からざりしと雖も、固より、他の事業に關しては、何等の實際的知識なく、又資金なかりしを以て、茲に知友の勸告に従ひて、著作に従事せんと決心せり。

然れども、彼は「チューリッヒ」以來、文筆を執らざること、既に十餘年に及び、日々實務に鞅掌して、全く讀書を廢し、無知無學なる人民とのみ接觸せしを以て、自己の思想を發表せんにも、之が文體方式に關して非常なる苦悶を重ね、自から恐くは、余は誤謬なしには、一行をも書くこと能はざるべし」と語れる程なりしが、千七百八十年五月に至り、漸く其の處女作

「隱者の夕暮」Die Abendstunde eines Einsiedlers.

を公にせり。實に「ルッソー」の「エミール」の出版に後るゝこと十八年に當れり。此の書は、初め「イゼリン」の週刊雜誌「エフエメリデン」に連載せるものにして、實に、彼が教育上の理想、見識の梗概を發表したる、教育史上最も重要なる者なれども、抽象的の短文集中過ぎざる故に、當時に在りては、未だ其の眞價を判別するに足る者少く、殆ど

1780(35オ)

出 詩想の湧

社會の注意を惹起するに至らざりき

二、「リーンハート、ウント、デルトルード」の出版 然るに、偶然の事件は、彼をして、其の天稟の文才を發揮せしめ、愉快通俗なる一種の文體を創めて、彼の名聲をして不朽ならしむるに至れり。當時「チューリッヒ」の議會は、市の秩序を維持する民兵の服裝を、近代的に改良せんと欲して法規を制定したるが、彼は、痛く古風の簡朴質素を愛好したるを以て、大に之を慨し、一種の諷刺文を草して、知友「フュッスリ」に送りしに、彼の兄は之を再讀して大に其の文才を奇とし、更に「ベスタロッチ」に勸告するに、著述に従事すべきことを以てせり。是に於て、彼は大に自信を得、一日「マーモンテル」Marmontelの道德談を讀み、其の文體に模して數篇を草せしが、悉く意に満たず、更に「ペン」を執りしに、各種の構想油然として胸裏に湧き、毫も思索を要する

ことなく滔々として一瀉千里の勢を以て、其のペンを走らしめたり。彼が不朽の傑作、

「リーンハート、ウント、デルトルード」  
 [Lienhard und Gertrud: Ein Buch  
 für das Volk. (人民の爲めの書)]

の第一巻は、即ち此くの如くして、僅かに數週間に成れるものなり。彼は、此の原稿を「フュッスリ」及「イゼリン」に示したるに、二人は之を讀みて、各其の趣味多きに驚嘆せり。然れども、尙文體生硬なる嫌ひ多きを以て「イゼリン」の忠告に従ひ、種々の修正を施し、彼の盡力を以て、千七百八十一年、著者の氏名を秘し、柏林に於て之を出版せり。當時彼の生計は、最も窮乏を極めたる時にして、會計用簿の間に原稿を起し、其の書肆より受けたる原稿料の如きは、實に僅少なりしと云ふ。然れども、其の一旦公にせらるゝや、大に一世の歡迎を受

け、多數の新聞雑誌は悉くこれを激賞し、或は其の梗概を拔萃したるを以て、雑誌「エフェメリデン」は始めて其の著者のヘスタロッチなることを明かにしたり。こゝに於て、各種の方面より、彼に對する賛辭續々として到り、恰も「レツシング」が「ミンナ、フオン、ベルン、ハイム」に於て喜劇代表作者となり、「ゲーテ」が「ヘルマン、ドロテヤ」に於て、叙事詩の創始者となれるが如く、「ヘスタロッチ」の名聲も此の名著に依りて、平民小説、村落史詩の創始者となるに至れり。元來、彼が此の教育的社會小説を公にせる本旨は、一は平民をして治く之を讀みて、自省發奮せしめ、二は上流紳士をして、平民教育の必要なることを感知せしめんとするに在りき。是れ彼が平民の爲めの書の第二題號を附せし所以なり。然るに、實際は之に反して、平民は別に之に注意を拂はず、上流社會は、單に一般に流行するものと

趣向を異にせる、好個の小説としてのみ之を歓迎し、眞に彼の熱烈なる理想を捕捉し玩味するが如き者に至りては、殆ど之を求むることを得ざりき。かくて、第二卷以下は、二三年を隔て、第四卷まで順次之を刊行したれども、小説的趣向漸く乏しく、乾燥なる理論却つて多きを加へたるを以て、世評遙かに第一卷に及ばざりき。然りと雖も、爾後五十年乃至九十年にして、彼が此の小説に描寫したる社會の罪惡は、瑞西の各地方に漸く其の影を沒し、寺領の廢止、學校の改良、貯蓄銀行の設立、道德の向上、風俗の改良、農業の進歩となり、所謂今日の樂園、瑞西となるに至れり。文學上に於ける彼の功績も亦偉大なりと云ふべし。

次ぎて、千七百七十九年、バーゼル獎勵協會が、懸賞論文、商業を基礎とする小自由國に於て、個人の生活費に制限を定むることの可

其の他の著作

否を募集せるに對し、彼は舊友「マイスター」Meister教授と共に、之に應じ論文を提出して、各賞金を受けしが、後、同協會は其の論文を出版せり。後二年を経て、千七百八十二年、知友「イゼリン」の勸誘に依り、週刊、瑞西新聞 Schweizer Blatt を刊行し、主として家庭の實際に對する事物の良否を論じ、約一年にして廢刊するに至れり。又時代の惡習を慨して、立法及殺兒に就きて、über Gesetzgebung und Kindermord. (二七八二)及癡狂院及感化院に關する論文(此の論文は散逸して傳はらず)等を公にせり。既にして、彼の知友にして恩人、援助者たりし「イゼリン」病死したるを以て、彼は大に落膽せり。爾來、全く孤立無援の境遇に立ち、晴耕雨讀、感興の湧くに從ひて徐ろに其の筆を執れり。此の間、彼はなほ試験的に、己の小耕地に飼料植物を耕作し、最初は又地方民の冷笑を蒙りしが、漸次に其の收益多きを覺知



せしめ、地方牧畜の改良に一步を進めしむるを得たり。幾もなくして、彼は又「クリストース、ウント、エルゼ」Christoph und Elise. と題し、「リンハイド、ウント、ゲルトルード」の註解たるべきものを出版したるが、好評を博するに至らず。其の他、尙寓話(標題を「ア、ベ、ツエ」書II)リンハイド、ウント、ゲルトルードに對する説明と云ふ) Die Figuren zu meinem ABC Buch. を起稿し、(後一七九七年) 人類の發展に於ける自然の進路の研究、Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschichts (一七九八)を出版したり。是等の書類も、亦彼の思想を研究するに方り、重要なものなれども、其の精練と系統とに於て、尙少からざる缺陷を有したり。

元來、彼は公衆の趣味嗜好を顧みることなく、只、自己特有の文體を以て、自己の確信する理想を發表するに止まり、文學的の描寫、記

述に於ては、固より何等の長所を有せざりしを以て、其の十有八年間の退隱生活と、苦心慘憺たる文筆の活動も、收入は、未だ生活を助くるに足らずして、依然たる一個の貧民たるを免れざりき。實に彼の如きは、豊富なる思想と高遠なる理想とを有し、深く祖國を愛し、一意、只、人類の幸福を増進せんことを希圖したれども、實際的手腕に缺くるところ多かりしを以て、全く當時の官憲より見捨てられ、却つて事毎に失敗を累ぬるに至れる者と云ふべく、深く同情に値するものあり。

**三、家庭の不幸** 而して、彼の家庭には、當時種々の不幸相繼ぎて到り、黒雲常に此の博愛教育家の周圍を圍繞せり。只、實際的手腕を有せる義侠婦人「エリザベツ」が、獻身的に家政の爲めに助力せるあるのみ。之より先、賢妻「アンナ」は、大に健康を害し、屢、重患に罹れる

家庭の不幸

を以て、自から家政を治むること能はず、已むを得ずして、「チューリッヒ」又は「ハールキル」等に轉地したり。然れば、彼女は、自から惱むと共に、常に其の良人及愛兒の身上を憂へざるを得ざる不幸の境遇に呻吟せり。是に於て、彼は最愛の一子「ヤコブ」をば、十三歳「ミュールハウゼン」の教育場に託し、次いで（千七百八十五年）「バーセル」に送りて商事を見習はしめたり。然るに「ヤコブ」は、不幸にして、幼時より虚弱なりしが、偶々大患に罹りしを以て、成業に至らず、三年を経て空しく「ノイホーフ」に歸還せり。其の後「ヤコブ」は（千七百九十一年）「ブルツグ」の人「マグタレナ、フロエーリッヒ」と婚して五子を擧げたるが、一男兒「ゴットリッブ」(Gottlieb, 1797—1863)の健全なるを除きて、他は悉く夭折せり。幾もなくして、「ヤコブ」も亦烈しき「リューマチス」に犯され、父母に先ちて永眠せり。時に「ペスタロッチー」の母「スザンナ」は、屢、其の女「ペスタ

ロッチーの妹」と共に、「ノイホーフ」を訪問し、暫く滞留して、「ヤコブ」の看護を助けしが、一千七百八十八年に至り、多年彼の一家の爲めには柱石となり、彼の爲めには第二の母となりし、忠實なる下婢「バルバラ」先づ病歿し、後、八年を経て、溫和にして慈愛に富める母「スザンナ」も、亦其の後を追ひ、彼は宿志未だ成らずして、あらゆる人生の艱苦と哀愁とを味ふに至れり。

22 ヤコブは先天的に癩癩を病みたりと云ふ。

23 「ペスタロッチー」の嫡孫「ゴットリッブ」は「ノイホーフ」に成長し、長じて「シュミッド」の妹と婚し、一男「カール」を擧げたれども、「カール」は、一千八百九十年に至りて病歿し、「ペスタロッチー」の血統は全く斷絶せり。

獨逸旅行及佛國革命

四、獨逸旅行及佛國革命 而して、此に特筆すべきものは、千七百九十二年、彼が「ライプツヒ」に嫁したる妹を訪ひて、獨逸に旅行し、「クロッ

Klopstock. 1724—1803  
 Goethe. 1749—1832  
 Herder. 1774—1803  
 Jakobi. 1759—1827

プ、ス、ト、ク、Klopstock. 「ゲ、エ、テ」Goethe. 「ヘル、デル」Herder. 「ヤ、コ、ビ」Jakobi. の如き詩人、文豪と相知ることを得たると共に、又諸種の學校、殊に教員養成所を參觀する機会を得たることなり。かゝる間に、彼は健康を回復したるを以て、徒らに虚名を贏ち得て、収益の乏しき著作を捨て、筆硯を洗ひて、再び静かに農業に従はんかとの考慮を回ぐらすに至れり。然るに、偶隣邦佛國には、空前絶後の一大事變を生じ、彼をして沈黙するを得ざらしめたり。革命事變即ち是れなり。元來、彼は少壯時代より、熱血義侠の精神に富み、社會下層の弱者貧民に同情を表し、夙に故郷「チューリッヒ」に於ける民主運動に助力したることは、既に述べたるところの如し。是を以て、彼は自己の理想たる社會改革の大事業も、或は此の事變に依りて、容易に其の障礙を除去し、敏速に完成し得べきことを信じ、竊かに之が評論を

したり。加之、彼の名著「リオン、ハード、ウント、ゲルト、ルード」に依りて、平民の爲め、人道の爲めに貢献したること多大なりと認められ、圖らずも、彼は、佛國々民議會の布告に依り、英國の哲學者「ベンサム」Bentham. 獨逸の詩人「シラー」Schiller. 教育家「カム、ベ」Campe. 北米合衆國の創建者「ワシントン」Washington. 等の名流と共に、佛蘭西共和國の名譽市民たる特權を贈與せられ、尙特に、同國の爲めに、來りて革命の事業を援助せんことを請はるゝに至りしを以て、彼は意稍動き、彼の友人等も、皆從來に於ける彼の閱歷よりして、彼を以て早晩革命軍に投ずべき過激黨なりと信じたり。然るに、事實は、全く之に反し、佛國の革命は流血の慘事を以て終始し、常に罪惡に充たされ、彼の理想とせる平和的進歩と相距ること遠かりしを以て、彼は其の當時（一七九二頃）起稿したる佛國革命の起源に關する賛否論

をも公にせず、静かに沈黙を守りて中立の地位に立てり。然れども、佛國に於ける此の革命運動は、やがて瑞西を動かし、又彼を動かして、終に一身を教育界に投ぜしめ、ラウメルラウメルの評したる如く、革命は、小國瑞西の歴史に取りても、偉人ペスタロッチーペスタロッチーの生涯に取りても、實に新紀元を劃するに至れるなり。

## 第六章 「スタンツ」に於ける孤兒院の事業

瑞西の革命——新政府に對するペスタロッチーの盡力——スタンツ孤兒院の設

立——院長就任——院内の状況、彼の苦心と兒童の進歩——辭任

一、瑞西の革命 抑、佛國革命の活劇が、其の慘酷なる黒布を撤し、自由共和の新組織を制定するや、彼女は、忽ち四隣の妹國、和蘭、白耳義、瑞西等の内政に干渉し、武力を用ひて己に模倣せしめんとせり。

## 瑞西革命

是に於てか、革命の波瀾は、瑞西にも及びしが、千七百九十八年三月、幾多の葛藤の後、四世紀の永きに互りて孤立したる、各縣個々の寡頭政治は、全く崩壊し、此に合同して一の「エルヴ、ジュウス」共和國となり、諸種の舊制を廢棄せり。始め、ペスタロッチーは、佛國の好意を喜び、國內の擾亂平定するに及び、直に佛軍の撤退を見るべしと信じたるに、事實は之に反したるを以て、心中大に平かならざりき。既にして、國內の秩序漸く定まり、新政府の組織成り、行政廳は五人の統領より成り、更に四人の長官に特殊の事務を委任するに至り、彼の知友にして新政府に列する者少からず、市民の自由と平等とを認むるに至りしかば、彼は此に眞の社會的進歩、道徳的改新の曙光を覓むることを得べしと信じ、強隣の壓力を嫌惡せる感情を一掃し、民主政治に關する諸種の著作を出版せり。

ベスタロ  
ッチの  
盡力

既にして、同年六月、瑞西國民議會は、國民の自覺を喚起し、新政の旨趣を國民に知悉せしめんが爲めに、新に新聞紙發行の計畫を決議し、文部長官スタツプエル<sup>23</sup> Staffler に之を委任せるに、スタツプエルは、知友ベスタロッチを舉げて、之が主任記者となし、瑞西國民新聞「*Ivetisches volksblatt*」と題せしめたり。是に於て、彼は「フュスリ」*ラファ*「*Ivetisches volksblatt*」の助力を得て自から之に執筆せり。元來此の週刊新聞は、國民の指導を以て目的とし、小學校教員、牧師、政府の官吏等には、悉く無償を以て送附する計畫なりしと雖も、政府の機關たるの故を以て、却つて獨立のものよりも、一般人民の購讀甚だ少く、其の效果乏しきを以て、幾もなくして廢刊せらるゝに至れり。

註 P. A. Staffler (1764-1835) 哲學、言語學の教授にして「ベスタロッチ」の知己なり。

貧民學校  
設立の希  
圖

是より先、彼は司法長官「マイヤー」*Meyer* に對し、教育の改善、小學校の革新の急務なることを述べ、新政府の助力を要求せしが、新政府は、彼が共和政に對して盡せる努力を多として、之を採納し、スタツプエルをして彼と協議せしめたり。時に、彼の友人中には、彼に官職を與へて財政上の困難を免れしめんとせしものありしも、スタツプエルは、小學校教員養成所を建設し、彼をして其の所長たらしめんとし、彼は、又嘗て「ノイホッフ」に於て經驗したる貧民學校を設立し、教育に關する自己の抱負を實際に試みんと欲せり。是に於て、數回協議の結果、種々の條件を定め、政府は一定の補助金を下附し、彼をして其の計畫を實行せしめんとせしも、適當なる建物缺乏せるを以て、土地の選定と建物の探求との爲めに、空しく時日を費せり。然るに、悲酸なる事變は、彼の獻身的なる精神と、其の不屈なる

三縣の反抗

活動力とを刺戟して、俄然其の方向を轉ぜしむるに至れり。  
抑、シュ、ワイ、ツ、ウ、リ、ウ、ン、タ、ワ、ル、デ、ン、の三縣は、フ、イ、ル、ワ、ー、ル、ス、  
タ、ツ、テ、ル、の大湖を擁し、山高く、水清くして、風光明媚なり。加ふる  
に、人情質朴、敦厚にして、祖先以來、舊教を奉じ、又往時の法律慣習を  
尊び、深く自治自製の民を以て任じ、瑞西自由の搖籃地なりと稱せ  
られ、自づから此の國の桃源郷を形成せり。従つて、時代の革命、中  
央政府の確立に對しては、蛇蝎の如く之を嫌惡したり。就中、ウ、ン  
タ、ワ、ル、デ、ンは、氣候溫和、地味肥沃にして、果樹畜群に富み、天慶を  
享くること多く、其の人民は、又敏捷伶俐にして、美術心に富み、たれ  
ども、全く近代文明と相離隔して、何等の交渉なし。

瑞西共和政府は、此等諸縣に聯邦の加盟を勸告したるに、彼等は  
固く之を拒絶したるを以て、政府は、遂に佛軍の威力を借りて、之を

佛將コル  
ビノーの  
擧行

スタンツ  
孤兒院の  
設立

壓服せんとせり。是に於て、勇敢なる下、ウ、ン、タ、ワ、ル、デ、ン縣の自  
由民等は、老幼男女の別なく、奮起して、之に抵抗したれども、衆寡相  
敵せず、且つ武器及戰術上の優劣の懸隔大なりしを以て、終に力竭  
きて降を請へり。然るに、佛軍は彼等の頑強なる抵抗の爲めに、莫  
大なる損失を被ふりたるを怒り、市街を焼き、民家を抄掠せり。偶  
地方の老幼は、スタンツの教會に集合し、老僧ルシ、Lundと共に祈禱  
を捧げつゝ、ありしに、佛將コル、ビ、ノ、ー、Corbinauは、此の會堂に侵入  
し、老僧を射殺し、數百の人民を屠り、市街を燒却せり。實に千七百  
九十八年九月九日(日曜)にして、ヘスタロッチーが執筆したる瑞西國  
民新聞第一號の發行せられたる翌日なり。

ニ、スタンツ孤兒院の設立 時に、スタンツに於て、此の事變の爲め  
に、生命を失ひたる者、四百人の多きに上り、其の他、或は財産を失ひ

或は家屋を失ひたる者甚だ多く、個人的に救済せられたる者數十人に及びたれども、尙百十一人の老人と百六十九人の孤兒は、全く助けを失ひて、喪家の狗の如く、路頭に漂泊するの已むなきに至り、悲慘の光景坐視するに忍びざるものありき。是に於て、聯邦政府は之が救済の法を講じ、十一月十八日、スタンツに孤兒院を建設することを決し、文部長官、スタツプエル、内務長官、レンガー、Pausen. に命じて之が計畫を爲さしめたり。彼等は、種々講究の後、一尼院の一室と其の園圃とを以て之に充てんことを決したるに、該尼院の長老及縣の參事員は、大に之が使用に反對したると、並に此の院の主宰者として責任を取るべきもの夫妻は、必ず舊教徒たらざるべからずとせる條件は、大に之が開設を遅延せしめたり。然るに、ステタロッチーは政府に此の美舉あることを聞き、己の多年懷抱した

1798.

院長就任

る理想を實現する好機至れりとなし、其の院長兼教師たらんことを望み、スタツプエル及知友、レグラント、Reyraud. に己の企圖を告白せるに、二人は深く之に賛し、熱心に推舉したるを以て、十二月五日、左の諸條件を約して、其の院長に任ぜられたり。

- 1、スタンツ地方に於ける、五歳以上の孤兒貧兒は、男女の別なく慈惠的に收容し、教養すべきこと、
- 2、院の設備は、なるべく之を經濟的に管理し、兒童をして漸次必要なる仕事に就かしむべきこと、
- 3、兒童の日課は、野外労働、家内労働及學業の三となすべきこと、
- 4、學業は労働を妨げざる範圍内にて、労働の間に之を課し、なるべく兒童の能力及熟練を發展せしむべきこと、
- 5、院の設備は、之を修繕して八十人の兒童を收容するに足らし

め、之が諸経費として、副知事「トルットマン」、牧師「ブジンガー」の監督の下に、六千フランを支出すべきこと、

かくて、彼は瑞西國民新聞を辭し、十二月七日、滿腔の希望を懷きて、スタンツに來着し、五十三歳の老骨を以て、困難なる此の事業に従事せんとせり。當時、彼は老夫人「アンナ」を慰諭して曰く、

『今こそ吾等の運命の決せらるべき秋なれ、もはや疑惑も永かるまじ。余が従事せんとするものは、現代の最も大なる理想の一なり。若しも御身の夫にして、今日まで世に誤解されたるに非ず、其の屢遭遇したる侮辱と輕蔑とに相當する者ならんか、恐くは吾等は救はるゝの望みなからん。されど、若し余が従來世に誤解せられ、而して、余自身の信ずるだけ價值ある者ならんには、御身は、必ず助力と忠言とを余より受くるの望みあらん。待て』

よ、御身の書狀は一語く、皆余の肺腑を貫けり。余は、もはや御身が余に對する永久の不信用を忍ぶこと能はず、過去三十年間、余に運命の來る日あらんと待たれたる御身は、必ずや三ヶ月を待つに耐へ難きことなかるべし、云々』

と。又友人「ゲスネル」に書を送りて曰く、

『余は、此に喜んで余の任務に就かんとす。余が生涯の天理想を實現すべき事業に着手せんとする余の熱心は、恰かも余をして「アルペン」の最高峰中に在るの思ひあらしむ。余をして、若し開始することを許さるゝならば、余は火なく、水もなくとも、直に着手せんとす云々』

と。彼が熱烈の態度窺ふに足るべし。

三、院内の狀況及彼の苦心 然るに、偶、嚴冬に際せるを以て、修繕の



工事徐々として進まず、漸く翌年一月十四日に至り、始めて數人の兒童を收容せり。然るに數日ならずして、忽ち五十人となり、二月中旬に至りては七十二人の多きに達したれども、院内の修繕未だ成らざるを以て、僅に一小室を有するのみ。物品器具未だ備はず、固より臥床の如きも足らざりしを以て、彼は己の臥床を分ち、己の衣服を與へ、日夜汲々として彼等の教養に盡力せり。是を以て、創立以來日尙淺しと雖も、彼の熱誠勤勉は、能く兒童を感化し、成績見るべきものあり。「トルットマン」「ブジンゲル」の二人が、其の政府に發したる報告は、極力彼の勞力を多とし、數年ならずして國家は必ず其の費用よりも多大なる報償を受くるに至るべしと述べたり。今左に、ベスタロッチーが、當年、行政廳に報告したる收容兒童の氏名、並に其の簡單なる觀察録を抄録せん。

- 1、ヤコブ、パツゲンス、ドツス(十五歳、父死去、母存生) 健康佳良、才能劣等、紡績の外何事も爲し得ず。從來乞食をなし來れり。
- 2、マチアス、オダーマツト(八歳、父殺され、母存生) 不具病身、虛弱にいて懶惰、何物をも知らず。
- 3、ヤコブ、アダッヘル(七歳、父殺され、母存生) 健康、臆病、何物をも知らず。
- 4、アンナ、マリア、ホイチュギ(十一歳、父死、母存生) 健康 全く放棄し置かれ、甚だしい悪習を有す、何物をも知らず。
- 5、クララ、ローゼン(十二歳、父存生、母死) 健康、才能可、勉強を好む、身邊のことも知らず、紡ぐことを得、乞食をなし來れり。
- 6、カタリナ、エール(五歳、父殺され、母存生) 健康 才能可、何物をも知らず。

兒童の多くは、此の如き類なりしを以て、或は、頭髮麻の如く亂れ、

塵垢全身に充ち、汚臭鼻を撲ちて近づく可からざるものあり。或は疥癬其の他の皮膚病に犯され、蟻虱衣服に滿つるが如きものありと雖も、彼は滿腔の熱誠同情を以て彼等を取扱ひ、毫も煩雜と不潔とを厭ふことなく、毎朝六時より午後八時に至るまで勞作と教授とに力を盡し、孜孜として倦むことなかりき。而して、かゝる多數の習性不良なる兒童を教養するに、僅かに一人の下婢を有せしのみにして、他に教師又は助手の依頼すべき者なかりしを以て、全く彼等と共に起臥し、終日終夜、彼等の爲めに全力を盡し、他に餘念あることなく、其の勞苦實に豫想の外に在りき。彼が其の書信中に、當時の生活を漏らしたるものあり。其の一節に、

「余に對して全く助力する者のなかりしことは、實に大なる苦痛なりき。然れども、そは又余の計畫の成効に關しては、大なる利便



(圖の院兒孤ツンマス)

を與へたり。何となれば、余は兒童に對して、常にあらゆる事を爲さざるを得ざればなり。余は朝夕一人にて彼等と共に生活したり、従つて、精神的にも、身體的にも、彼等の要求を充たすものは、全く余一人の手に外ならざればなり。彼等に取りて、必要なあらゆる助力と慰藉と教訓とは、皆直接に余自身より爲されたり。彼等の手は常

に、余の手に握られ、余の眼は常に彼等の眼に注がれたり』  
と述べ、更に又

『吾等は共に泣き、共に笑へり。兒童は世界もスタンツも忘れて、只余と共に在り。余も亦彼等と共に在りしことを知りしのみ。吾等は互に飲食を分てり。余は一人の家族もなく、一人の友もなく、一人の家僕もなく、只彼等と共に生活せり。彼等の病めるときも、健康なるときも、眠りしときも、余は彼等の間に在り。夜は最も遅く寝ね、朝は最も早く起き、彼等と共に祈禱し、彼等の望みに依りて其の眠るまで教へたり。』

と記したるは、誠に偽らざる當時の實況なりしなり。

然れども、從來、兒童の多數は、懶惰放縱の生活を爲し、粗野不規律の習慣に慣れ來りしものにして、此の孤兒院に入るときは、何事を

爲さざるも、只善良に養はるゝものなるべしと信じたりしかば、幾もなくして、在院を嫌ひ、或は逃走せんとする者あり。或は、此に在院するときは、終日勤務せざるを得ざるを以て、必ず熱病に犯さるべしと噂せり。蓋し、開院の当初一ヶ月間は、入院兒童の多數が、多少の疾病に罹りたるまゝ來着せると、食物生活及土地氣候等の變化に依りて、一種の熱病に犯されたるもの多かりければなり。然れども、幾もなくして、彼等も回復し、春風漸く湖上を吹き、アルペン山地の積雪も融解する頃に至りては、却つて大に健康を増進し、容貌殆ど見紛ふ許りとなれる者多かりき。其の初め、悲哀、虛弱、不信、陰險、怯懦、怠惰、無感等、あらゆる冬日の慘憺たる相貌を以て、來れる者も、忽ちにして、溫き春光に浴し、愉快、快活、熱心、親切、溫和の顔色を呈せるのみならず、彼の熱誠と不撓の努力とは、漸く彼等を動かし

て、自づから彼を愛慕せしむるに至れり。然るに、彼等の父兄は、恰かも、ノイホーフに於けるが如く、或は児童の疾病の原因を以て食物の不良に在りと信じ、或は勞働の過重に因るとなし、乞食を常業として、街上に彷徨ふ女さへも、來りて其の兒を顧み、

『憐むべき汝の相貌よ、吾が家に在りても、此に在るよりは仕合なるべきこと必定なり。いざ予と共に立ち去らん』。

と、聞えよがしに、咳き、日曜日毎に、此の類の父兄來り、其の兒を泣がしめて、伴ひ歸らざることなし。或は、其の児童を入院せしめたるを以て、特別の恩義を彼に與へたりと考ふる者あり。或は、もはや其の児童をして、乞食をなさしむること能はざるを以て、之が報償として若干の金錢を得んと要求する者さへあり。是を以て、當初は一兒を送りて又一兒を迎へ、児童の出入常ならず、彼が、自から當

時の院内の状態を思ひ出で、鳩小舎にも似たりきと記したるは誠に所以なきに非ざりしなり。然れども、逃れ去りたる児童は、皆不良の輩にして、其の父兄は、いづれも児童の身體の清潔となり、新しき衣服を與へられたるときを窺ひて伴ひ去りたるなり。而して、残りたる児童は、漸次に彼の感化教養に化せられ、其の父兄の尋ね來りて、一言の感謝もなさずして辭し歸らんとするとき、或は、耻ぢて涕泣する者あり。或は、自から其の母に向ひ、此に在るの幸福なるを語りて、歸宅を肯んぜざるものすらありき。

學業は、彼等の多數に取りては、全く新奇のものなりき。されど、數週にして、其の成績の漸く進歩するや、彼等の熱心は驚くべきものあり。晚餐の後において、若し、彼が、子供等よ、就眠せんか、又は何事をか學ばんかと問ふことあらば、彼等は異口同音に、勉強よ、勉強。

院内の秩序

よと答ふるを常としたり

獨り院内の秩序に關しては、彼は兒童の自然の要求、内部の感受に依る高尚なる道德の基礎に立脚するものならざる可からずとなし、外部的他律的形式的の拘束を用ふることを排斥し、かくの如くんば、却つて其の純潔なる道德的感情を傷ひ、兒童をして背叛するに至らしむべしと確信し、全く人爲の規律を用ひず、組織を形成せずして、教授し訓練したり。其の状恰かも熟練なる園丁が、外部より樹木を苦むることなくして、自然の發芽を待ちつゝあるが如し。かくて彼は此の方法に依りて別段の困難なく、却つて豫期以上に成効し、彼等乞食の子弟の間にも、兄弟姉妹の間に見るが如き平和友情の成立するを見るを得たりと確信せり。

然れども、當時の社會に於ては、殆ど彼の不眠不休に似たる大努

周囲の障害

力を理解せず、其の精神を誤解して、甚だしきは惡意を以て彼を遇する者少からざりき。何となれば、彼の熱誠と確信とは、能く院内に於ける諸種の障害に打勝つことを得たれども、外界に於ては、尙政治的宗教的教育的の疑惑不信の如き、強大なる障害、彼の前面に横はりたればなり。蓋し「ウンターワルデン」地方に於ては、民心尙統一的の聯邦政府に歸服せずして、動もすれば、政府の事業に反抗せること其の一なり。次ぎに、宗教思想の堅固なる此の地方に在りては、従來、舊教信者に非ざれば、一卑職と雖も、決してこれに任ずることあらざりしに拘らず、彼は新教地方に成長し、稍、自由主義を帯びたる信仰を有せしを以て、地方人より之を見れば、一の異教徒に過ぎず。新政府は、此の如き人物を派して、地方子弟の信仰を攪亂せんとするものなりと邪推したること其の二なり。尙當時に

於ては、教育に關して多少の知見を有するものと雖も、未だ彼の説の如く、如何なる下等の貧民子弟にても、精神的、道德的、身體的の諸能力を享有せざるものなく、若し之を自然的に適當に刺戟し、覺醒するときは、必ずや、自づから燦然たる光輝を發し、内部より高尚なる發達をなすに至るべきものなりと信ずるものなく、人爲の干渉を用ひず、信仰は、只信仰に依り、思考は、只思考に依り、技能は、只技能に依り、愛は、只愛に依りてのみ養成せらるゝものなりとせる彼の教育上の新主義を解せざりしが故に、彼が一定の口課豫定に由ることなくして教授し、而かも、何等院内に規律秩序を定むることなく、自から兒童と共に勞し、共に學ぶが如き方案に對しては、何人も絶對に其の効果を信じ能はざりしこと其の三なり。是を以て、曩きに彼を賞賛せる副知事「トルットマン」は、幾もなくして、院内の秩

序計畫の乏しきことよりして、彼が管理の能力を疑ひ、速に之を改善せざる可からずと政府に報告して、暗に彼の罷免を冀ひ、又、牧師「ブジンガー」も文部長官に報告して、かの孤兒院の失費多くして、兒童の不潔且つ蠻的なることを非難し、牧師「グート」の如き、後年に至り、其の著書に於て、全く彼の選任されしことを非難し、「彼は自から最良の食事を用ひ、兒童には最悪のものを給したれば、彼等の眼は光を失ひ、其の頬は色を失へり。彼等は只動物の叫聲を眞似ることを教へられたるのみなり」との極端なる毒筆をさへ用ひたり。かくの如く、彼の勞苦困難は、其の多大なること、殆ど常人の耐へざるところなりしに拘らず、之に反して、其の事業の成績、効果の如何に就きては、殆ど之を認識するものなかりき。只、文部長官「スタップエル」一人ありて、彼の人格を信任したるを以て、當時の政廳も、

是等の非難に耳を假さず、全く彼の爲すところに一任し、其の事業を繼續せしめたりき。

<sup>24</sup>、<sup>25</sup>、<sup>26</sup>は、「メスタ」の人、「メスタロッチー」が孤兒院を經營せし時は、僅かに五歳に過ぎざりいと云へば、其の著書は、單に、當時周囲の人々の誤聞を物語れるを聞きて記したるものなるべしと云ふ。

然るに、地方の擾亂再び起り、佛軍復た、此の地に鎮するに至りしが、發病者甚だ多かりしを以て、政府は、遂に、此の人道の搖籃、新教育の發祥場たる孤兒院の一部を擧げて、病院に充つるに決し、メスタロッチーの極力反對せるにも拘らず、千七百九十九年六月八日<sup>25</sup>院内には僅かに二十名を止め、可憐なる六十名の兒童を、各地の家族に分配して、此に佛兵を療養せしめられたれば、彼が半生の理想計畫も殆ど敝履の如く廢棄せられたり。是を以て、彼は心中大に平かなら

彼の辭任

ず、各兒に二組づつの衣服と若干の金錢とを頒ちて、各其の郷里に出發せしめたり。偶、彼も、亦、心身過勞の爲めに病に罹りしが、遺恨と失望とは、一層の疲勞を來し、靜養を要せしを以て、後事を政府の代表者に引繼ぎ、涙を揮ひて、思ひ出多きメスタッスを去り、友人「ツェインダー」Zehnder. の勸告に従ひ、「ベルン」を距る南方十餘哩、ツッネル湖の西方なる「グルニゲル」Gurniger. 温泉場に赴きて靜養せり。

<sup>25</sup>、此の孤兒院は、其の後、「メスタ」市の參與、「ツァン、マッット」van matt. を監督とし、種々の改革を加へ、三十人前後の兒童を收容せしが、「メスタ」ロッチー時代の盛況に達せずして遂に閉鎖せり。

事既に決行せられて、後、聯邦政府に報告せられたるが、政府は此の博愛獻身的教育家が、半歳に餘る日夜の勤勉努力に酬いたるもの、僅かに四百フランに過ぎず。かくて、彼が其の妻に約したる

三ヶ月の日子は、再び過ぎ、三たび回ぐりたれども、好運は、遂に彼を見舞はず、依然として彼は貧寒に苦めり。然れども、彼は「スタンツ」に於て、益々教育に對する經驗を加へ、興味を感じ、嘗て「ノイホーフ」に於て公にしたる名著「隱者の夕暮」中に述べたる理想も、此の地に於て始めてこれを實際に試みるの機會を得たれば、其の心身の勞苦の多大なりしに拘らず、精神的には、彼の生涯を通じて最も幸福なりし時代なりしと云ふべく、教育史上に不朽なる彼の事業の眞の出發點は、實に此の孤兒院に在りしと云ふも、不可なく、後世の人をして「ペスタロッチ」と「スタンツ」の名稱とは、實に斷つべからざるが如き強き聯想を生ぜしむるに至りたり。

## 第七章 ブルグドルフに於ける小學校教育

スタッフエルの計畫——小學校就職及新教授法の考案——アルグドルフ學舎の建設と學舎の生活——ゾーヨー及アルナーの評——學舎の發展——瑞西の内争と巴里會議——佛國旅行の失敗と收穫——ミュンヘンアグゼー移住——フエーレンベルヒとの聯合——イフェルテン移住

一、ブルグドルフ小學校就職 六週間にして彼の健康は回復し、胸中萬斛の活力は再び泉の如く迸發せり。「スタッフエル」に報じて曰く、余は回復せり、再び爲すべき事業を要す。余は、恰かも海中の巖上に暫し憩へる游泳者の如し。もはや待つこと能はずと。嗚呼、事業——社會的・人道的事業は、實に彼の生命なり。彼は、此の事業を爲さずしては生くる能はざるなり。寧ろスタンツに還りて、再び



彼の孤兒院に従事せんことを願ひ、「スタツプエル」も亦彼の天稟を認めて、其の事業を繼續せしめんとし、之が援助を怠らざりしも、佛軍容易に歸國せず、政府も亦再び彼を用ふる機會を有せざりしを以て、彼は此に、其の方向を轉じ、小學校教師となりて宿志を貫かんとせり。然るに「スタツプエル」は、熱心に教育の爲めに盡力し、眞の自由を國民に扶植せんが爲めには、善良なる教員の養成所を建設するの必要ありとなし、千七百九十九年、有名なる教育家「ザルツマン」(Zahn) の門人にして、神學、哲學を學び、汎愛派の教育主義を奉じたる「フィッシャー」(Fischer) を用ひ、「ブルグドルフ」城中を貸與して、之が創設に従事せしめたるが、「スタツプエル」は、尙彼を「フィッシャー」に紹介し、何等の職名も報酬も要求することなく、單に城中に於て自由なる一室を與へらるるを條件として、此に教員たらしめんとせり。然

スタツプ  
エルの計  
畫

るに、「フィッシャー」は、事志と違ひ、未だ成立に至らずして、「ブルグドルフ」を去り、幾もなくして死去したり。

是に於て、「スタツプエル」は、尙彼を知事「シュネル」(Schnell) 及博士「グリュム」(Dr. Grimm) に紹介したるを以て、此の兩者の斡旋に依り、更に「ブルグドルフ」市内の一小學校に奉職するを得るに至れり。當時、市は上下兩街に分れ、上街は幾多の特權を有する富豪及市民階級の住所にして、下街は、即ち貧民又は市民たるを得ざるもの、住所なり。従つて、小學校の如きも、各別に組織せられ、下街人民の子弟は、上街の小學校に入學することを許されずして、別に一校をなせり。彼の就職したるは即ち此の貧民街の小學校にして、時に七十三人の兒童を有し、校長は「ザムエル・ヂスリ」(Samuel Dysh) とて靴工なりき。抑、當時の小學校教員の地位は甚だ低きを以て、多くは、他の業務の

小學校教  
員就職

副業となり、小學校教員たるには、其の徳望學力の如何に依らずして、専ら兒童を收容すべき家室を有するや否やに依りて定まれりと云ふも不可なく、往々其の隣人も、教室内に、其の仕事を持ち來りて働ける有様なりき。「ヂスリ」の俸給は、勿論甚だ少なきを以て、自宅を教室に用ひ、業務の傍ら、兒童を教授せるが、其の教授法は、極めて迂遠なる因襲的方法に依り、讀方初步を授け、尙宗教問答、讚美歌を授けたるに過ぎざりき。嗚呼、あらゆる人生の艱苦を嘗め來りたる彼は、今や五十三歳にして、無報酬を以て、殆ど修養なき一靴工の副業に過ぎざる學校の助教となれり。運命の皮肉も亦極まれりと云ふべし。實に千七百九十九年七月の末にして、彼が小學校教育に従事したる最初なり。

是に於て、彼は、全く從來行はれたる教授法を廢し、凡ての教授書、

問答書を用ひず、只、兒童をして、齊唱せしめ、更に石盤を用ひて、各自の思ふところを自由に書かしむる等、獨特の方法を採用して、大に兒童の興味を惹起し、其の信賴を博したり。然るに、校長は、やがて己の位置を奪取せられんことを恐れ、嫉妬、恐怖の情を起したり。特に、彼が宗教問答を廢したるが如き、粗暴なる教授を見るに至り、驚愕の餘り、黙止すべきに非ずとし、私に之を兒童の父兄に報道せり。果然、彼等は、結束して、新教師を排斥すべく起ち、若しも市當局にして、此の新教師と、其の新教授法とを採用せば、我等は、悉く子弟を退學せしむべしと脅迫せり。

二、轉任及新教授法の考案 「ヂスリ」の教唆と彼等の脅迫は、共に成功し、ペスタロフチーは、亦其の職を失へり。然れども、「シニエル」及「グリム」の信用篤かりしを以て、再び上街に於ける市民の一小學校の教

新教授法の考案

師に任せられ、ステューリ *Miza Stehli* 女史の校長たりし一小學校に於て、五歳より八歳に至る男女二十餘人の一學級を擔任し、此に何等の制限拘束を被ることなく、或は自由に、其の創意に成る方法を考案し、或は嘗て「スタンツ」に於て考案し経験したるものを再び繰り返へし、漸く自信を得るに至れり。彼は從來、教授に方り、繪畫を用ひ來れるが、更に進みて、兒童の面前に實物を提示し、之に依りて教授するに至りしは、實に此の時なりしと云ふ。或日、彼は、兒童に窓の繪畫を示し、硝子板及窓枠の數を算へしめたりしが、兒童の一人は、忽ち其の室に於ける窓を眺めて、呼んで曰く、

『吾等は、繪畫よりも、實際の其の窓に就きて學び得ざるか』

と。是れ、實に彼の教授法に取りては、天來の福音なりき。彼俄かに獨語して曰く、

『渠誤らず、兒童は學習に對して、自然と、彼等自身との間には、何物をも要せざるなり』と。かくて、彼は其の繪畫を撤去し、爾來、兒童をして直接に事物を觀察せしめたり。其の他、兒童の爲めに石盤を用ひしめ、又組合せの字母板を利用したるが如き、此の間、教授上の考案少からず。居ること八月にして、彼の教授したる兒童の學業大に進み、偶、定期の試験を執行したるに、僅かに數月にして、幼年兒童に讀み書き、算術の初歩を能くせしめたるのみならず、尙、幾何、歴史、地理、博物等の趣味を起さしむるに至りたる等、其の成績の優良なること、學事委員をして驚嘆せしむるに至り、彼等は、郡長と共に署名して、彼の斬新なる教授法と、其の勤勉熱心に對し、感謝的賞狀を送るに至れり。かくて、五月に至り、彼の功績に報いんが爲め、市は彼を拔擢して、六十人の兒童を有する第二小學校の教師に任じ

たり。彼が成功の報を耳にして、最も喜びたるものは、彼の知己、スタツプエル<sup>△</sup>なり。當時、社會に於ける彼の評價は未だ定まらず、或は、彼を以て愚物<sup>△</sup>となし、甚だしきは山師<sup>△</sup>と評するものあり。「カール、モナード」Karl Monardの如き、彼を罵りて、彼は文法・習字・圖畫・算術・唱歌・幾何のいづれをも能くせず、通常生徒が二年の修學に價する知識も有せず、一冊の書籍をも手にしたることなき夢想者なり」と評したり。是に於て、同年六月、スタツプエルは彼の教育上の主義方針を一般に周知せしめんが爲めに、教育援助會(Gesellschaft von Freunden für das Erziehungswesen)を設け、會員中より委員を選びて、彼の學校を視察し、彼の教授法に關する意見を調査し、之を報告せしめられたれば、彼は喜びて之に應じ、其の見解<sup>26</sup>を發表したり。

<sup>26</sup>、此の論文は實に彼の教授論の系統的敘述に於ける最初のものなりしが、惜い哉、散逸して世に傳はらず。

**三、小學校建設の新計畫** 是に於て、彼の教授に對する世評漸く良好となり、教育援助會の委員等は、村落の小學校教員が、三年にして漸く達するところを、彼の教授法は、僅かに六ヶ月にして達すべしと評し、かゝる有益なる方法は、宜しく之を瑞西全國に普及すべきものなりとさへ報告するに至りたれば、政府も大に其の功勞を嘉みし、彼の半歳の盡力に對して五百フランを賞與し、就中、シユネルは大なる同情と賞賛とを以て彼の教授法を獎勵せり。然れば、彼は此に始めて、好運に向ひたるが如しと雖も、尙幾多の希望と煩悶とを有せり。何となれば、彼の本來計畫し建設せんと欲するところのもの、は、教育事業の一局部たる教授法の革新に止らず、教育の改良に依りて、貧民を向上せしめ、一般社會を改進して、人類の福利を

増進せんとする大事業に存したればなり。然れども彼は、スタツプエル<sup>ツ</sup>及其の他の奨励翼賛に刺戟されて、永く他の監督の下に活動することなく、自から獨立の學校を建設し、無條件に志すところを研究し、考察することの必要を自覺せり。然るに、幸にして此の希望は、スタツプエルの盡力により、千八百年十月、政廳がブルグドルフ<sup>ツ</sup>城を彼に貸與して、此に學校の建設と、毎年五百フランの補助金の下附を許可したること、并に教育援助會の後援に依り、三千二百フランの資金を公募することの發表となりて、漸く之を實現するを得べき機會に到着せり。

是より先き、フィッシャー<sup>ツ</sup>が生前に於て、貧民教育及教員養成事業に着目し、政府の許可を得て之に着手せんとせるとき、友人なる「ガイス」地方の牧師に依頼して、貧民兒童をブルグドルフ<sup>ツ</sup>に招致せり。

是に於て、千八百年一月クルジ<sup>ツ</sup>なる青年教師は、二十八人の兒童を率ゐ、ブルグドルフ<sup>ツ</sup>に來着し、市内の慈善家の家庭に宿泊して、其の兒童の教授を繼續しつゝありしが、ベスタロッチ<sup>ツ</sup>と相知り親交を保てり。然るに、フィッシャー<sup>ツ</sup>は、事の容易に成らざるを以て、「メルン」よりの備聘に應じ、次ぎて死去したるを以て、クルジ<sup>ツ</sup>は喜んでベスタロッチ<sup>ツ</sup>の勸告に従ひ、此に合同したれば、彼は始めて、一助教師を得、十月二十四日に至り、自己の特許を得たる城中に、中流階級に屬する兒童の一小學校を建設し、將來、更に、孤兒院及教員養成所を附設せんことを公表したり。然るに、時恰も、革命争亂に際したるを以て、十分の資金を集むるを得ざりしが故に、翌千八百一年一月を以て開校し、師範學校は、其の生徒を得難きを以て、貧兒を收容し、之を教養して漸次教員たらしめんとしたり。

27、「ザイファート」は二十六人と記せども、今は「ラウメル」に従ふ

「クルジー」は、アッペンツェル縣の人にして、家貧なりしを以て、永く教育を受けざりしも、天性誠實勤勉にして學を好み、十八歳にして小學校教員となり、爾來數年の經驗を積み、深く兒童を愛し、教授上の抱負手腕亦非凡なりしが、是に於て己の率ゐれる兒童と共に、(此の兒童の間に、後年「ベスタロッチ」の爲めに、書記となりて忠實に努力せる教員「ラムザウエル」あり、「ベスタロッチ」に合同し、彼の麾下に在りて協力することゝなれり。

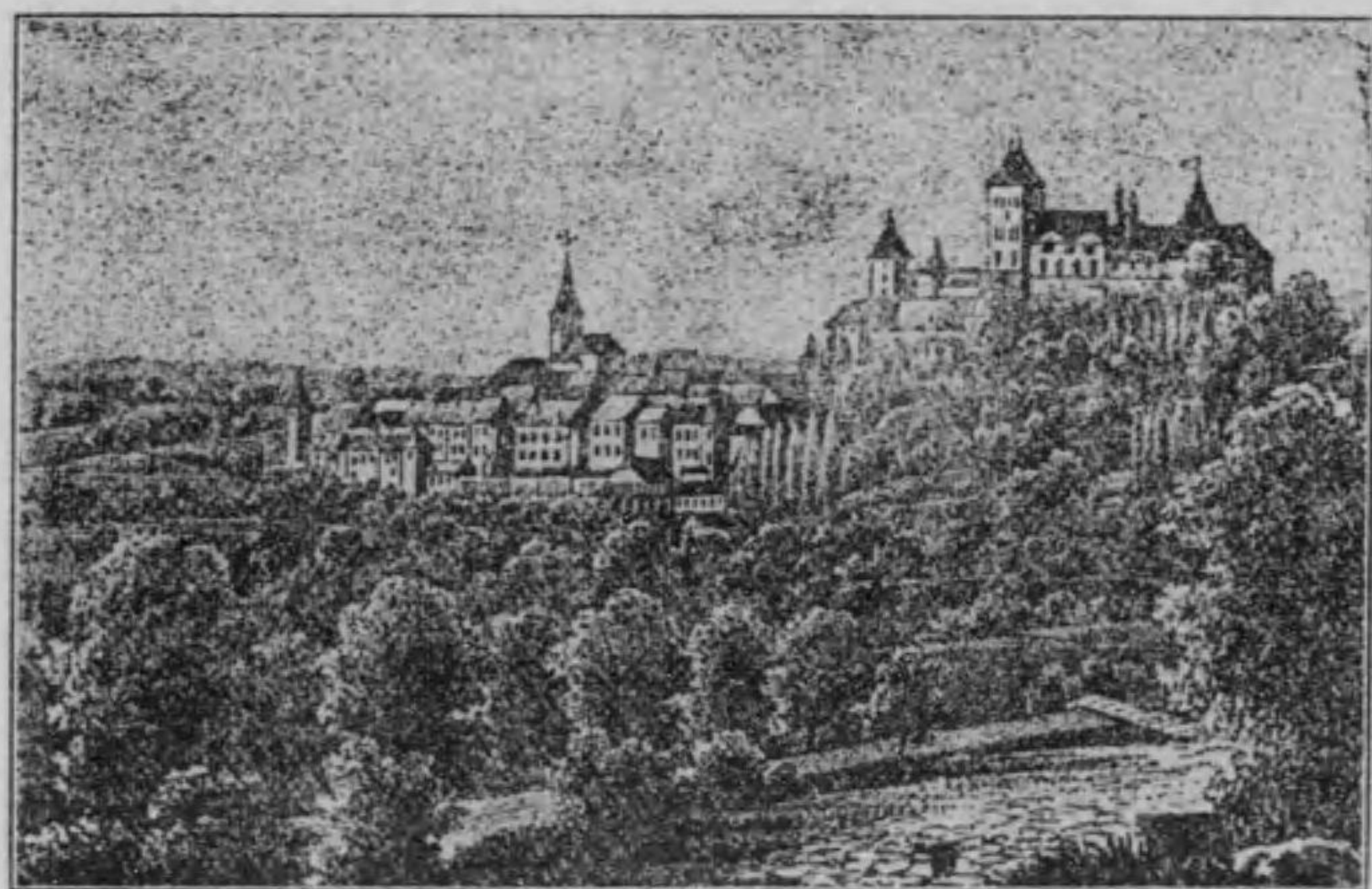
尋で「クルジー」は、「パーゼル」に赴きて、舊友「トブラー Tohler」を訪ひ、「ベスタロッチ」の事業を語りて、其の援助を求め、「トブラー」は、又其の友「ブース Busch」に勧めたるに共に來り應ぜり。「トブラー」は、少時十分の教育を受けざりしが、後發奮して牧師たらんと志し、「パーゼル」

トブラー  
の來援

に於て家庭教師となり、傍ら大學に於て修學に専心せしが、「クルジー」の勸誘に依りて來援せり。彼は學才あり、教授に關しても亦大なる趣味を有したり。「ブース」は、幼時より「ラチン・グリーキ・ヘブリウ」修辭論理等を學び、又音樂圖畫に對して天稟の才能あり。高等教育を受けんことを志し、製本匠となりて自から生活の資を求めしが、「リンハード・ウント・ゲルトルド」を讀みて深く感ずるところあり。「パーゼル」の友人等が、「ベスタロッチ」を以て狂人に過ぎずとなし、極力之を諫止したるに拘らず、彼は、斷然「ブルグドルフ」に來りて、「ベスタロッチ」に投じ、甘んじて其の助教師となれり。

抑、此の「ブルグドルフ」に於ける學校は、其の組織固より大ならず、れども、彼の天稟獨創に依りて、計畫經營せられたるものにして、而かも三年半に互りて繼續し、彼の理想の實行及追究の場所たりし

ブルグドルフ  
の状況



(城 フ ル ド グ ル フ)

ものにして、普通教育史上最も記憶すべき學校なり。元來ブルグドルフは、ベルン縣第二の都市にして、ベルンの北二哩の地に位し、ラインの上流なるエムメ川に瀕し、風光絶佳なり。城郭は市の東南、川に沿ひ孤立せる(高き四十)丘上に峙ち、鬱蒼たる樹林の間にあり。建築の様式一様ならずして統一を失へども、室内廣潤にして學舎として用ふるに適せり。其の大

トリーツの記述

ブルグドルフの地位

さを異にせる四個の高塔は、嶄然として城中に傑出し、一大異彩を放ち、東南、建築物外には、別に三個の露臺ありて眺望に便せり。千七百八十三年、ペスタロッチーを訪問して師事したる丁抹人トリーツツ Tollitz の記録したるものあり。

「ブルグドルフ」の如き利便なる地點を、ペスタロッチーが、全瑞西國内の、他に於て求めんことは固より難かりき。此の小市は、首府の驕奢を離れ、飲食の社交を絶ち、政治的の爭論及貴族富豪の譎詐を避け、靜かに其の研究の爲めに努力するに宜しく、然かも必要の物資を求むるに難からず。且つ此の「エムメ」の平野は、土地豊饒にして、人民も亦勤勉なるを以て、他の地方に於けるよりも、物價は廉く、彼の學舎の如き大なる家政に於ては、大に其の費用を節することを得たり。加之、又あらゆる文化、教育的、宗教的、政

治的の寛容并に思想の自由に關して、最も缺陷多き此の國に於ても、此の地は、實に彼の事業に對し、國家的・教會的方面の妨害干渉最も少き地方なりしなり。

若し夫れ「ハスタロッチー」の住所より眺望するとき、周圍の自然の雄大と秀麗と多趣と變化とに富むことは、殆ど之を形容するに難く、余は幾回となく、この繪畫の如き光景を眺め、而かも其の度毎に新しき興味を以て之を喜びたり。

「エムメ」川は、小丘の麓を洗ひて、同名の平野を貫流す。城郭其の丘上に在り。然れば「ハスタロッチー」學舎の子弟は、水浴・水泳には絶好の機會を有したり。此の川の支流には、水車を設くるもの多く、又處々水道を通じて灌漑に便し、併せて此の地方を美化せる光景眞に言語を以て名狀すべからず。「ブルグドルフ」は此

野  
エムメ平

の平野の狹まるところ、森林の多き二大山脈の會するところに位し、麗はしき園圃・散歩場・高地・森林等に圍繞せらる。換言すれば「ブルグドルフ」城郭は、其の變化と刺戟とに富む大自然と、人爲の開拓に依る豊饒とに依り、ベルン縣中最も愛好すべき地點に在り。若し夫れ、眼を西北に放たば、「リラ」の山脈は三哩の彼方に連り、之と對立して、東南六哩乃至八哩の地點には「アイヌベルグ」の大山脈横はり、夕陽將に西に沒せんとするときは、夕榮え此の大山脈に映じて、光景の美なること他に其の比を見ず。其の他、周圍の「アルペン」連山を眺むるときは、「ユングフラウ」、「メンヒ」、「グリンデルワルド」、「アイゲル」、「シュレックホルン」等の山脈、悉く雙眸の中に入る。余は、初めて此等の山脈を眺めたる時ほど、此の世界に於て大なる威力を感じたることなし。余が到着後、六日



にして、一天初めて拭へるがごとく晴朗となれり。此の雄大なる自然の光景を以て、余を驚かさんと期したる「ブリス」は、恰かも此の樂しき瞬間を待ち設けたるが如く、余を伴ひて窓に憑り、其の光景を恣にせしめたり。余は出すべき言葉もなく、只驚きて前方を凝視し、茫然として天地の互に融合せんとするが如き此の大自然の風光を眺めたり。其の壯大優麗なる光景は、實に他に比類なく、全く余をして自失し、自己の滅却せるが如き感あらしめたり。余は、曾てかくの如く、創造物につきて造物者の偉大を知りたることなく、又此の時ほど如何なる大膽なる吾人の像も決して現實を超越する能はざるを感じたることなし。

四、ブルグドルフ學舎の生活 「ブルグドルフ學舎に於ては、児童は皆早朝床を離れ、一處に會集するや、ベスタロッチ」は來りて、児童と

ブルグドルフの生活

「お早う」を交換し、児童の中央に出て、朝の祈禱をなし、或は全児童の前面にて、特に若干の児童と對話し、漸次に朝の祈禱に導きたり。最初の一年は、敢へて確定的の日課を設けざりしも、概して授業は早く午前六時より開始し、中間に三十分の休憩を設け、朝食をなさしめ、十時に至る迄、運動・遊戯・散歩を許し、午後は又授業を繼續し、夕刻に至れば、食事の後散歩をなし、九時の後は児童をして短き祈禱をなさしめ、就眠せしむるを常とせり。食事は質朴を旨とし、朝食には肉汁・晝食には肉汁・野菜及肉とし、次に午後四時後に、麵麩及果物を給し、晚餐には又肉汁及野菜を與ふるを常とせり。概して教師は児童と起居・飲食を共にし、又各分れて其の寢臺を児童の寢室中に置き、運動・遊戯の際には、教師は皆児童に交り、時々ベスタロッチ自身も之に加はりて、其の興を助けたり。かくて、児童就眠

の後各教師は一室に會して、或は當日に於ける經驗を語り、或は種々の研究協議を凝らせり。學舎の整頓と清潔とは能く保たれ、往年に於ける「スタンツ」の比に非ざりき。

兒童に對する彼の取扱方針は、恩義と愛情とを經とし、而して又兒童の教師に對する信頼と服従を緯とし、教育は全く此の兩者を基礎として行はるべきものとなし、何等の秩序規則を設けず、從つて褒賞懲罰を用ひざりき。彼は全學舎の父として、凡ての者を愛し、又學舎内の凡ての者は、彼を「フアイテル」(父)と呼びて敬愛したるが、兒童は皆喜びに満ち、而かも活潑々地にして、教師に對しては絶對の服従を表したり。要するに、彼の學舎は一の家庭の如く、信頼平和の氣分に満ち、其の全員は常に家族的に生活したり。而して、是れ實に彼の理想とするところなりき。一日、兒童の父なる農夫此

訓練の方針

の學舎を見舞ひて、驚き嘆じて、

「嗚呼、これ學校に非ずして實に家庭なり。」

と述べたるに、彼は之を聞き衷心より喜んで答へて曰く、

「余が汝より受くる賞讃は、實に其の辭より大なるはなし。從來の如く、家庭と學校との間に大なる溝渠を作らば、全然別種のものなりと考へたるは、大なる謬想なり。余は、全然此の舊風を打破し、學校は、只家庭生活に對して價值と情趣とを與へ、情操と道徳とを發達せしむる點に於て、教育上有益なることを明かにしたり。是れ余の成功にして、深く神に謝するところなり」と。

當時、伯林の人ゾーヨー Soyauk、ハイデルベルヒの教授グルナー (Gruener) は、各ブルグドルフの學舎に在りて、後共に「ペスタロッチ」の傳記及事業を記述したるが、共に當年に於ける學舎の狀況を髣髴

たらしむるものあり。『グーヨー』の記事に曰く、

『全學舎は、早く午前六時に於て活動を開始し、午後十時に至り、兒童は皆講堂に會集し、メスタロッチは、彼等の中間に立ちて、慈愛に富める檢閲をなすを常とせり。兒童の體育德育は、共に完全なり。彼等は、特に嗜好を刺戟せらるゝが如き食物を取らざると共に、又體力を弱め、感覺を迷はし、心情を損ね、徳義を壞るに至るが如き誘惑に接することなく、全く世界より隔離して、不斷の活動と教師の監督の下に生活し、常に小兒らしき無邪氣と自然的の輕快とを失はず、彼等の日課は、圖畫と算術との外は、殆ど何物をも考へざるほど、心中に固定し、日曜日にさへも、三々五々教室に集りて自修し、敢へて倦むことを知らざりき。訓練は、全く兒童に自由を與へ、只其の濫用を戒むるのみ。規則

として何等の拘束力を存せず。教師、兒童の風習は、全く山間に離居せる住民の如く、自然的素朴的にして、社會の慣習禮儀辭令の如き者を有せず、凡て活潑素朴なる衝動に従ひて行動するのみ。然れども、かゝる自由の間に、各人、皆正常なる限界を超えず、従つて彼等の間に、頑固執拗、惡意の戲弄、喧嘩、口論の如きものを生ずる事なく、創立以來、懲罰を用ひたること殆ど稀れなるのみ。か、教師の間にも、嫌忌すべき頑固、又は、術學等の態度、全くなし。要するに、彼の德育に關する主義方針は、卓越なるものにして、常に少年の心中に、自然的の活氣ある、溫情を保たんと力をめよ。何となれば、善の萌芽の發達するは、此の自然の溫情中に於て、す。るものにして、却つて、道徳的反省の微光中に存せざればなり。汝自身を兒童が愛し得る如く、而して汝を十分信用し得る如き

關係に立たしめよ。とは訓練に於ける彼の大主義なり。かくの如く、教師と児童とは慈愛に充てる調和の間に生活し、教師は毫も命令又は非難を試みて、自己の教権を作らんことを夢想するが如きことなく、惡に關しては只温和なる調子を以て警戒し、善に關しては只拍手と満悦の容貌を示すのみ。學舎には何等の規則なければ、児童は課業の間にも、或は坐し、或は立ち、或は自由に其の席を選めり。然れば、自然的に學習を好む者よりも、年長者が互に押し進みて、善き席を占むるに至るが如き弊なきに非ず。故に、一定の目的を達せんが爲めには、何等かの秩序を要するや明かなり。又、彼の用ふる特異なる齊唱法は、児童を混亂に陥るゝことなく、其の精力を回復して課業に集中せしむることを得たり。然れども、児童は齊唱の際に、往々喜びて大

なる叫聲を發し、若し児童の數團、一時に之を行ふときは、喧噪其の極に達し、余は、到底教室内に止ること能はざりし程なりき。かかる極度の精力消耗は、音聲の爲めにも宜しからず、児童の耳も亦喧噪に慣らされ、通常の談話にも、叫聲を伴ふに至るべし。然れども、彼の教授法は、児童の興味と愉快とを保つに効果多く、其の結果、彼等をして課業の學習は、心的疲勞を生ぜずして、却つて愉快なりと感ぜしめたる一大特色を有せりと。ガルナーは、又此の學舎に於ける朝夕の會集に就き、左の如き記述をなせり。

「朝夕の會集には、最年少者の外は、悉く出席せり。此の會集には、何等の形式的儀式なけれども、彼の熱情と精力とに依りて、注意を集中せしめ、又活動を誘起したり。余は、早朝六人乃至八人の

生徒が父老ヘスタロッチーと會するが爲めに、冬季に於てさへ午  
前六時には既に起床し、曉暗中に靜かに佇立するを見たること  
屢なり。かゝる間にも、彼等は決して少年の客氣に驅られて騷  
擾することなく、低聲に談話したり。蓋し、此の學舎に於て、かゝ  
る早朝に、兒童を會集せしめしは、彼等少年に嚴肅なる感情を惹  
起せしめんとしたるなり。

やがてヘスタロッチーは燭臺を持ちて出て來るが、其の慈愛と  
信實とは、彼の相貌に輝くと共に、又能くお早うの挨拶にも現は  
され、交互に數人の兒童と握手し、各自に對して簡單なる談話を  
なすを常とせり。或は親密なる調子と熱心とを以て、兒童の一  
人毎に、健康、學業の進歩、困難なる課業、又は其の父母の各自に希  
望する才能等の如何を問ひ、彼等をして皆其の父母を回想し、父

母を安慰せしめんことを希はしめたり。時に、或は、一兒に對す  
る訓言より、一般に及び、特殊の事件より、凡ての心情に具はれる  
道德、宗教的情操に訴ふることありき。

彼は又屢朝禮の終りに於て、彼の教訓を、其の日に冥想すべく  
勸告し、以て其の行爲に影響あらしめんとせり。而して、夕禮の  
際には、先づ其の早朝に於ける決心を如何に持續せしかを問ひ  
たるが、快活、誠實なる兒童は、其の性質と能く調和せる方法を以  
て取扱はるゝ時は、能く其の性質を隠さざるものなることを明  
かにしたり。

是より先、千八百一年、ブルグドルフ開校後、幾もなくして、彼の長  
子ヤコブは疾に罹り、同年八月五日「ノイホーフ」に於て死去したる  
が、不幸にして、彼は創業の事務に忙殺せられ、其の愛子を病狀に訪

ふことを得ず、前年に於ける面會を最後として、幽明境を異にした  
り。是に於て、ヤコブ<sup>28</sup>の寡婦は、ブルグドルフに移住し來りて、又、ヘ  
スタロッチーの事業を助け、此の學舎の大家政に任じ、兒童の爲めに  
親切なる保護者となりて、大に衆望を得たり。尋いて、翌年十月、ア  
ンナ夫人も亦孤兒となれる其の孫「ゴットリープ Gottlieb」を携へ、忠  
實なる下婢「エリザベツ」と共に、「ノイホーフ」より移轉し來り、共に城  
中に生活したれども、生來多病なる夫人は、當時殊に甚だしく喪心  
し、學舎の喧噪に堪へず、常に一室に閉居したれども、尙、時々「ヘスタ  
ロッチー」の爲めに會計及通信の用務に當りたり。

<sup>28</sup>「ヤコブ」夫人は後、「グスタフ」<sup>29</sup>に嫁し、女學校設立に盡力せり。

**五、學舎の發達** 當時學舎の財政は、政府の補助金ありしと雖も、勿  
論困難なるを免れざりき。故に、兒童は、なるべく簡素なる生活を

學舎の發  
展

縣の保護

以て甘んじ、教員は皆些少なる其の俸給の一部を提供し、學校は悉  
く犠牲の實行所となれり。是に於て、政廳は「ベルン」縣内に於て燃  
料伐採の特權を與へ、又縣の財政窮乏の故を以て、あらゆる廳舎の  
修築を行はざるに拘らず、特に彼の學舎の爲めに、ブルグドルフ城  
のみを修繕して、彼に貸與すべき室數を増加し、尋いて、彼及他の教  
師に若干の俸給を給して、公設學校に準じ、尙、毎月十二人の小學校  
教員を此に派して、其の教育法を講習せしむるに至れり。

最初、彼の學校を設立するや、尙、彼の政治的閱歷と宗教的見解と  
に反對なるが爲めに、特更に彼の學校に對しても、非難を試みたる  
ものなきに非ざりしも、多數の新聞雜誌は、多年に互る彼の社會的、  
教育的努力を多とし、又其の新教授法の有効なる事より、彼の爲め  
に大に有利なる記述を爲すに至れり。特に「クルジエ」ト「ブラー」

「ブリス」の如き優良なる助教師の協力を得てより、児童學業の進歩著しくして、豫想外の信用を博したり。既にして「スタツプフル」の後任たる長官「モリア」は、自から終日此の學舎を視察して、有利なる報告をなし、補助金増加の議を提出して議會の容るゝところとなりしが、幾もなくして、舊政府倒れて、新政府成り、又彼の學舎の實況を調査せんが爲めに委員を選定せり。千八百二年、ベルンの教育會議長「イーツ」Eitzは、其の調査報告を發表したるが、又大に彼を推奨したるを以て、今や此の學舎の名聲益揚がり、或は一私人よりも往々巨額の寄附金を寄贈するものあり。千八百三年には、児童數七十二人、教師十人、翌千八百三年には、児童數百人を超え、尙續々出願者ありたれども、收容の餘地なきを以て之を拒まざるを得ざるに至り、教師には「ネーフ」Neuf、**「バライウド」**Barraud、**「シュタイネル」**Steiner

**「シュニツド」** Schmid、**「ニーデラー」** Nidderer 等、益多數の有爲の才を加ふるに至れり。其の他外國より留學の教師も、常に二十人を下らず。是より先、千七百九十九年より「ヘルベルト」は、瑞西に家庭教師たること二年に及びしが、其の歸國に際し、特に彼を「ブルグドルフ」の市立小學校に訪問し、其の教授上の主張を問ひ、併せて教授法を視察せり。同年、彼は「ゲルトル」トの**「教授法」** Wie Gertrud Ihr Kinder Lehrt. を出版したるに、忽ち歐洲各國、特に獨逸諸國に普及したるを以て、彼の名聲愈高く、各國の識者、教育者をして、續々として「ブルグドルフ」巡禮を思ひ立たしむるに至れり。就中、著名なる外國來觀者中には、埃太利の「エチオロスキー」Izioroski、「トランゼー」Transee、丁抹の「シュトローム」Ström、「トルツァン」Toritz、獨逸の「ゾーエー」Soyaux、「グルナ」Grunerの如き人士あり。而して、一たび此の學校を見舞ひたる

者は、皆此の學舎の兒童の身體健全にして快活なること、圖畫及地圖の作製に熟練なること、暗算及算術幾何に練達せるを見て、驚嘆せざるはなく、彼の主義學說に反對せる者と雖も、又一たび彼の無邪氣にして、純潔素朴熱心なる人格に接し、其の愛情の深大なるを知るに及んでは、忽ち其の賛成者辯護者とならざるはなかりき。

之より先、瑞西國內の政治界は屢變動を生じ、曩きに、一たび政界を斷念したる「ペスタロッチ」をして、再び勢ひに乗ぜしむるに至れり。千八百二年四月、瑞西は新憲法を制定せんが爲め、共和國の名を以て、全國の代表者を「ベルン」に召集したるが、該議會の容認するところとなり、七月三日、新憲法を宣言し、新政府を組織し、國內の秩序漸く定まれるを以て、永く國內に駐屯したる佛軍漸く退去するに及び。然るに、此新憲法と統一的新政府に對する國內の論議

瑞西の内  
争

盛にして、再び騒亂を醸し、新政府は九月に至り、「ベルン」より退去するの餘儀なきに至りしを以て、再び佛國の干涉を請へり。是に於て、佛國政府は諸政派の仲裁者となり、國內の聯合統一を回復し、平和を維持せんが爲めに、瑞西元老院及各縣、其の他の公共團體より適當の代表者を選出し、「パリ」に派遣して協議會を開催すべきことを以てせり。

此の時「ペスタロッチ」は、「チューリッヒ」及「ベルン」の兩縣より、代議士「Consilia」として選出せられたるを以て、祖國の幸福と、教授上の自己の新説の擴布とを夢み、特に、當時、彼が祖國の振興の政策として主張したる

- 1、良好なる國民教育、
- 2、良好なる警察裁判制度
- 2、良好なる軍制
- 4、良好なる財政系統

ペスタロッチ  
チの政  
綱と佛國  
旅行



の四綱を携へ、喜んで佛京に向へり。かくて、十二月に至り、巴理に於ける第一回代表者會議に出席せるが、彼は佛語を解せず、且つ容貌奇怪なるを以て、會議に於て重きを爲すを得ざりしが、獨り社會改革問題、教育問題に關しては、熱心なる主張をなし、特に熱心に、第一執政官、ナポレオンに面謁せんことを請へり。然れども、彼は國民を愛して自由を與へんと欲し、此は國民を抑壓して其の主たるんことを期す、兩者の思想は固より同じからず、然れば、ナポレオンは之に應ぜず、冷笑して、

『余は爲すべき事業多く、未だいろはの教授に立入るを得ず。』

と。私かに他に語つて曰く、『彼れ、ハスタロッチー學徒は、エスイタ』宗派の如きか』と。かくて、彼は、元老院議員、モンゲのみをして、彼の主張を聴かしめたり。『モンゲは、寛宏敏才の人物なりしかども、

ナポレオン

遂に彼の眞意を解する能はず、ハスタロッチーの所説を聞き了りて曰く、吾人の堪ふるところに非ざるなり」と。

「ザイフアット曰く、嗚呼、いろはの教授、此の一語實に、ナポレオンの性格を最も能く發表せるものに非ずや、彼の自利的なる、征服者に對しては、國民教育は、果して何の利益ぞ。抑、國民に對する眞の愛情なく、國民の眞の必要を理解する事なき彼の如き者が、國民教育の何たるを知らざるは、固より其のところなり。宜なるかな、彼がいろは教授以上に教育を解せざりしことや」と。又曰く、彼れ、ナポレオンが、ハスタロッチーに關して、かゝる冷笑を逞くせるは、寧ろ自己の性格の低級を證するものに過ぎざるなり。蓋し、人は自利的なれば、なるほど、益々人類に對する親愛なる貢獻犠牲を解すること少く、人類を輕侮すれば、するほど、人類の精神的教育、道德的醇化に

ザイフアット  
の評

關して興味を有すること能はざればなり」と。

かくて彼の宿論は、用ひらるゝ望みなかりしのみならず、當時巴理の新聞紙中には、彼を評して「山師<sup>△</sup>」なりと惡罵したるものさへありしを以て、彼は會議の終結を待たず、飄然として「ブルゲドルフ」に歸れり。此の時「ブリス」は彼を迎へて、

「君は「ナポレオン」に面謁せしか」

と問ひたるに「ベスタロッチ」直に答へて、

「否とよ、彼は余に面會を欲せざりき」

と云へり。後年、彼は自から告白して曰く、余は巴理に行きしが、何物をも見ざりきと。實に彼は巴理に於て、何等新事物を見ざりしのみならず、之れが爲めに、却つて彼の政治論が社會に重んぜられざるに至り、彼の佛國行は全然失敗に歸したりき。然れども、彼は

巴理滞在中に於て、瑞西各州より派遣せられたる名流議員と相知りたるのみならず、此の間に、少壯にして、常識に富む、ム、イ、ラー、Von Muhl、と相知り、遂に彼を招致して「ブルゲドルフ」に來り投ずるに至らしめたり。これ、實に、彼の巴理行の貴重なる收穫なり。

曩きに、瑞西議員が、巴里會議の際、議定したる諸案は、千八百三年二月に至り、調印せられたるを以て、聯邦制度の再興となり、統一政府倒れて、新政府樹立せらる。従つて、將來「ベスタロッチ」の事業に對する政府の補助は、殆ど望みなきに至れり。然れども、當時に於ては、彼の名聲噴々たりしを以て、「アールガウ」、「ルツェルン」、「チューリッヒ」の各縣政府は、皆其の學舎の補助を辭せざるが如き狀況あり。加ふるに、瑞西議會も亦委員を選びて、彼の博愛的意見を實現するが爲めに、要すべき事柄を調査せしめたり。

1804(59才)

「ムンヘン  
ンブクゼ  
ー」移住

然るに、ベルン」縣の新政廳は、ブルグドルフ」城を回收して、之を知事官舎となさんとせり。固より、新政廳は、彼を以て革命派にして、聯邦制度の賛成者に非ずとなし、殆ど彼に對して同情を有せざりしと雖も、名聲内外に藉甚たる彼の學舎を亡滅せしむるに忍びず、ベルン」を去る、僅に三哩「ムンヘンブクゼー」 Münchenbuchsee、の地に在る、古き一僧院の使用を許したり。是に於て、千八百四年六月二十日、彼は、約四ヶ年半の間、其の新計畫と努力とに依りて名聲を博せる、ブルグドルフ」を去り、七人の教師六十七人の兒童と共に、ムンヘンブクゼー」に移住せり。然れども、此の僧院の使用は、最初より一ヶ年間を限りとせしを以て、幾もなくして彼は又他の適當なる地に移らんとする意ありき。然るに、當時「ムンヘンブクゼー」を去る十餘町なる「ホーフキル」 Hofwil、の地に、汎愛學派として有名

「フェーレン  
ンベルヒ  
」の聯合

なる「エム、マ、ヌ、エル、フェーレン、ベルヒ」 Emmuel Fellenberg、の學校あり。彼は富有の家に生れ、且つ敏才達識の士にして、計畫管理の能あり。夙に「ベスタロッチー」と親交あり。彼の設立せる學校に於ては、特に農業を重んじて、富者に之を授け、又貧者は之を、敏才正直の勞働者たらしむべく養成せんことを期し、當時既に四百人の生徒を收容せしが、彼は「ベスタロッチー」に勸告し、互に協力して、新に移轉したる學校の經營に従事せん事を以てせり。固より、兩者の思想、感情、性格は相反し、彼は敏才にして、打算に長じ、且つ意志強固なる人物にして、此は直觀と感情とに富み、熱誠にして己を忘るゝの士なり。故に、若し、兩者眞に協力して、相互の缺陷を補充するを得ば、最も幸福なるべしと雖も、そは全く不可能なりき。かくて、初め「フェーレンベルヒ」は、新學校の財政及管理の事務に任じ、「ベスタロッチー」は、校主

として専ら教育の實務に當るの契約をなせしが、是に於て、ベスタ  
 ロッチー部下の教員も、其の指揮を、フェレンベルヒに仰ぐ者あるに  
 至り、ベスタロッチーも意大に平かならず、今や全校の一致幸福、昔日  
 の如くならざりしかば、遂に兩者の間に衝突を生じ、同年九月將に  
 大破裂を見んとせしが、僅かに、ニーデラー、ムラーの仲裁に依りて、  
 事なきを得たれども、ベスタロッチーは、之より益、他に移住せんとす  
 る決心を固うするに至れり。是より先、彼のブルグドルフを去ら  
 んとするや、各地の都市は各條件を提出して、彼の學校の設立地た  
 らんことを望みしが、彼は自己の教育意見を佛語地方に普及せし  
 めんとの意志ありしと、恰かも、又佛語地方より熱誠なる歓迎あり  
 しとに依り、遂に、此の歲十月十九日、トブラー、ムラー、チユルク等、數  
 人の教師を此の地に留め、兒童より懇切を極めたる訣別を受け、ク

1804.

イフェル  
テン移住

ルジ、及、ニーデラーと、八人の兒童を伴ひて、ノイシャ、イテル湖畔  
 のイフェルテン Irtzen. (獨逸語地方にては、イヴェルドン Yvelton. と  
 呼ぶ)市に來れり。當時、イフェルテン市は、其の舊城郭を彼の學舎の  
 爲めに提供する筈なりしも、修繕工事未だ完了せざりしを以て、彼  
 は、僅かに其の一二室を借りて暫く此に住したり。

「ムンヘンブクセー」に残されたる學舎は、「ベスタロッチー」に代りて、  
 一時「トブラー」其の教育を統督せしが、固より「フェレンベルヒ」の手  
 腕に對抗すべくもあらざるを以て、種々の干涉を被ふるに至り、加  
 ふるに、父老「ベスタロッチー」の不在は、全く學舎内の中心を失ひて、失  
 望の極に達せしめたり。當時の學舎の給仕にして、且つ助教師を  
 兼ねたる「ラムザウエル」の手記に曰く、

「ムンヘンブクセー」に於て、余は、生涯、始めての不幸に遭遇せり

ラムザウ  
エルの所  
感

此の地に於ては何人も余の心情を慰むるものなく、余等は常に「ブルグドルフ」に於て、萬事に貫通せられたりと信ぜる愛と温情とを失へり。何となれば「ベスタロッチー」は情を主とし、「フェーレンベルヒ」は知を主としたればなり。……然れども、此の學校に於ても其の長所なきに非ず、何となれば、從來よりも一層善き秩序を保ちて、より多く學習し得たればなり。然るに、千八百五年二月に至り、「ベスタロッチー」より書信ありて、余に「イフェルテン」に來り合すべきことを命ぜられたれば、余は、再び、彼れ父老の愛情に浴し、併せて又、余が親愛なる教師「クルジ」及「ブリス」に會することの望みを得て大に喜べり。かくて、數月後に至り、全學舎「イフェルテン」に移りて、「ベスタロッチー」に連合せり。

と。かくて、「ムンヘンブクゼー」に於ける學舎の教師及兒童等は、漸

次「イフェルテン」に去りたるを以て、「フェーレンベルヒ」は其の約に背くを怒り、「ベスタロッチー」に對して損害の賠償を求め、之を完了するに至るまで、校内の物品を差押へたり。是に於て、「ベスタロッチー」は自から「フェーレンベルヒ」に會見して、其の解決を圖らんとせしが、爭論愈激して猛烈となり、到底彼の讓歩せざるを知るや、「ベスタロッチー」は自から其の靴を脱ぎ、彼に對して曰く、

『君にして、飽くまで賠償を求めて已まざれば、吾等は此の靴までも君に送り、師弟悉く跣足にして、「イフェルテン」に向ふも辭するところ、に非ず』

と激語したり。然れども、結局「ベスタロッチー」より若干の賠償を爲すべきことを約し、千八百五年七月一日を以て、全學舎は悉く「イフェルテン」に移轉したり。

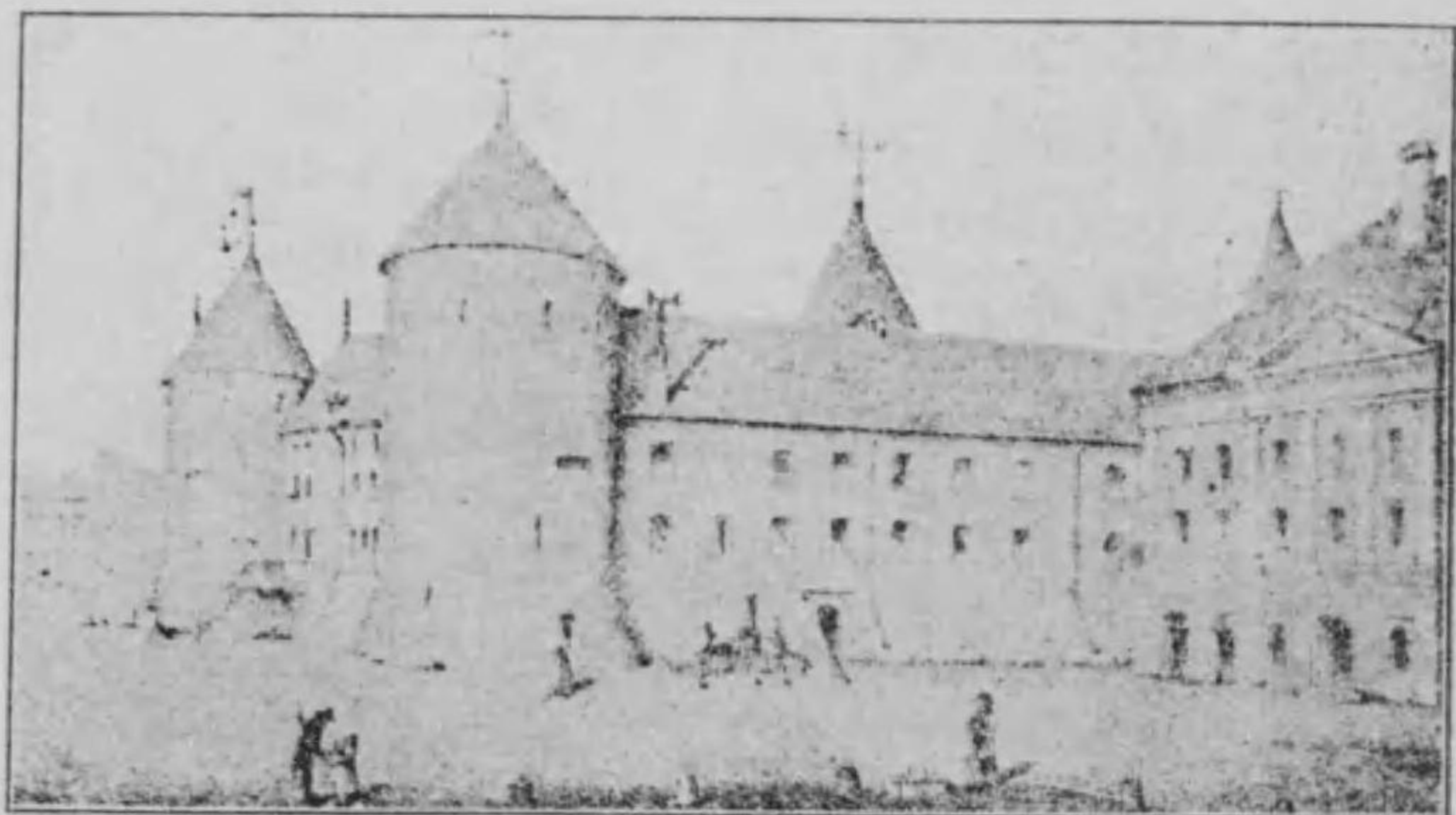
### 第八章 「イフェルテン」に於ける學校事業

イフェルテン學舎の發展——優良教員の輩出——學舎内の生活——  
兒童の日課——各種の作業訓練——ヴェーマン教授及佛人の觀察所感

イフェル  
テン學舎  
の發展

一、イフェルテン學舎の發展 抑、イフェルテン城は、「ペスタロッチー」の教育事業に充てんが爲めに、此の市に於て提供せるものにして、「アインシャテル」の大湖に臨み、湖畔は平野遠く連り、牧場耕地多し。城内の四隅には、高き圓塔あり、周圍に廣き園圃ありて、多數の兒童を收容するに適せり。彼は、千八百五年より、千八百二十五年に至るまで、二十一年間、此の學舎に在り。彼の名聲の最も高かりしも、此處にして、彼の事業の悲惨なる没落を遂げたるも亦此處に在り。今や、ムンヘンブクゼーなる學舎も、此に併合せられたるを以て、兒

優良教員  
の輩出



(城ンテルエフイ)

童の數、百數十の多きに達し、之に加ふるに、ブルグドルフ以來、彼の部下に在りて教授と研究とを繼續し來れるクルジトブラーブスの外、今や思索に長ぜるニーデラー J. Niederer の如き、質朴にして見識あり、管理の才能あるムラーの如き、懇切にして而かも意志確固なるミーグニの如き、品性高潔にして同情に富めるテウルク Von Turck の如き、卓越なる教師の來援するあり。又、ブルグドルフ以來、彼の教育したる兒童中よりも、忠實なるラムザウエルの

如き敏腕にして數學の天才を有せるシュミット Schmidt の如き後、伯林に於て數學の大家となりしシュタイネル Steiner の如き良教師を出せるを以て、今や彼の學舎は濟々たる多士を有せり。而して此等の教師は、皆彼の徳望と教育主義とに心服し、殆ど金錢上一錢の報酬をも受くることなく、甘んじて彼の膝下に教鞭を執り、且つ其の研究を繼續せり。

ニ、イフェルテン學舎の生活 當時、ベスタロツチーは毎朝二時に起床し、其の著作の起稿及整理に努力したるが、部下の教員及自己の養成せる助教師に對しても、殆ど同一の熱心を要求せり。然れば彼等教員も、三時又は四時に起床して、或は薪を伐り、火を點じ、或は必要なる書寫に従事せり。ラムザウエルの手記にも、吾等は數年間、午前三時以後に於て、尙臥床に在りたることなく、而して、夏季も

イフェル  
テン學舎  
の生活

兒童の日  
課

冬季も、早朝三時より六時まで勤勞せりと云ひ、ブロッツホマン Blochmann も、亦此の學舎に於ては、兒童は、午前五時、教師は、四時又は其の以前に起床し、ベスタロツチーは二時に起床せり。而して、教師は數年間各、夜業をなし、或は家事をも手傳ひたり。」と記せり。

かくて、兒童は、午前三時より約一時間、課業の準備をなしたる後、講堂に會集す。かくて、彼は全員の面前に祈禱をなせり。其の際、彼の講話の題材となりしものは、聖書中の金言、道德の問題等にして、彼は、多く徐かに歩みつゝ、非常に興奮的、教訓的に訓話したり。

夫れより、兒童は校庭に出で、大唧筒を以て汲出する井泉の冷水にて全身を拭ひ、其の強壯なるものは、冬季と雖も僅かに襪衣一枚を以て、半は氷結せる運河まで走り行き、以て士氣を養へり。水浴終れば、麩麩と肉汁とより成れる簡單なる朝食を喫し、八時より宗

教、國語、數學等の學校課業を始め、正午に至る。每一時の間には小休あり。十時には稍永き休憩ありて、饑を感ずる者は、家政主任、リザベツに乞ひて、麵麩又は果物を受くべし。正午より午後一時に至るまでは、放課時間にして、教師と児童とは、悉く湖畔の平野に至り、或は游泳をなし、或は種々の遊戯を演ずるを常とせり。午後一時、肉汁と野菜より成る晝食を取り、一時半若しくは二時より再び課業を始め、四時又は四時半に至るまで繼續し、其の後、再び休憩あり、又湖畔に遊びて、體操又は自由遊戯をなし、乾酪及び麵麩等の簡單なる食事を爲す。此の際、児童は、自由に食物を受け取り、親友と共に、三々五々相携へて、城外の園圃中に坐し、愉快に之を食するを得たり。教師は又數室に分れて會食し、相互に愉快なる談話を交換せり。五時より六時までは、翌日課業の準備にして、六時より八

時までは諸種の課業あり、最後は自由課業にして、児童は隨意に其の愛せる學科を修めたり。早朝起床より、此に至るまで、凡べて十時間。かくて、祈禱の爲に集合し、晚餐の後、九時に至りて就眠せり。又、此の學舎に於ては、唱歌は最も重要な課業にして、學舎内の何人も能く歌ひ、終日、何れの處にても、能く唱歌したり。此の獨逸風なる唱歌は、附近の住民に對して好感を與へたること甚だ大なりき。此の學舎に於ける唱歌の發達に對する功績者は、實に瑞西出身の教師、ブファイエル及ネーダリの二人とす。児童は又園藝、手工を課せられたれども、手工は種々の工具を要すること多きを以て、規律的に行はれず、只、製本及模型の製作等を練習し、園藝は園丁の指揮に従ひ、區域を分ち交互に勞役せり。全校児童は、又時々、城外數哩の地に行軍、擬戰をなし、天候宜しき時は、



午後、於て、小隊を編成し、旗、太鼓等を携へて、教練を試み、その他、觀兵式、懸賞射撃をなし、夏季は水泳、登山、冬季は氷滑、雪合戦を催せり。新年の始めには、生徒は皆自己の製作にかゝる地圖、圖畫、作文、數學、歴史、博物等の記述を其の父兄に送り、學校に於ては、宗教的儀式を擧げ、父老、ベスタロッチの講話を聞き、父兄の贈品を頒ち、晝食の饗應をなし、夜は炬火行列を催せり。毎年、一月十二日は、彼の誕生日なるを以て、或は室内を裝飾し、唱歌をなし、或は演劇を催し、全校歡喜して彼の健康を祝するを常とせり。

## 教師間の關係

教師は、三日毎に交代して、各四十人づつの監督をなし、其の他、上級教師は、又若干兒童の特別監督を受持ち、毎週一回、彼等の學業品行及進歩の狀況を報告せり。

「ベスタロッチ」は、毎夕、是等の報告を臥床に於て受け取り、一々之を熟讀して、特殊の兒童あるときは、五人又は六人づつ之を自室に招きて、低聲に訓戒又は賞揚せしが、其の結果甚だ有効なりき。

土曜日には、午前九時に教員會議あり、兒童の學業又は操行に就きて論議し、或は其の他の日に於ても、教育上の論議をなすことあり。其の際、ベスタロッチは多く出席せず、只重大なる事件に會せば、彼の室に會議を催せり。かゝる時に於ては、彼は、時として滑稽を含み、愉快らしく、或は又興奮し、或は又戸を排して、室外に突進するが如く激昂することあり。然れども、兒童の無邪氣なる容貌に接すれば、直に平和の氣分に復して、再び愉快となり、自から己の激昂を悔いたり。訓練は全く自由に、して十分なる信頼を與へ、毎日二個の城門は門衛なくして開放せられ、兒童は己の家庭に於けるが如く自由に出入せり。少壯教師は、能く兒童と運動遊戲を共

にし、又園藝手工をなし、親密なる交際の間、其の監護をなせり。教員相互の間は、完全に一致し、児童に對しては、凡べて一人格の如く發動し、恰かも細心なる慈母の如く児童を取扱へり。學舎内の生活は、極めて簡朴にして、諸種の用具の如きも、殆ど原始的の如くあり。教師中の長老は、城外に生活したれども、大多數は城中に在り。而かも、自室を有せざるを以て、若し靜肅なる仕事を爲さんとするときは、屋根裏の上階に登るか、又は城中の舊き塔中に入らざる可からず。ベスタロッチー夫妻は、北側に於ける第二階の一室に共棲し、時々、二三の教師を招待して、珈琲を供し、又時としては、晚餐會を催して、若干の生徒を列席せしめ、又市民の重なる者及外國人等を招待する事ありき。アンナ夫人は、ヤコブの死去以來、大に失望し、常に健康不良なりしも、親切にして、憐愍同情の念

深きを以て好評なりしのみならず、尙想像に富み、詩的情趣豊かにして愉快なる會話の中心となりき。

當年、此の學舎の生徒にして、後、ベスタロッチーの傳記を編し、彼并に彼の學舎の内部生活に關して、極めて趣味ある記述をなせるもの多し。左に「ワイド」縣の出身にして、後、歴史家となれる「ヴェーマン」教授 Vulliamin. (1797—1879) の記せるものあり。

「彼は凡べて吾等を愛し、吾等は凡べて皆彼を愛せり。吾等は暫しにても彼を見ざるときは、甚だ悲しく、且つ寂しく感じ、再び彼の姿を見出すときは、暫らく彼を見送らざるを得ざりき。

余の誕生地たる「イフェルテン」の市民は、長大なる廣間にて大なる中庭を圍める此の舊城を、全く彼に委して管理せしめ、教室、遊戯室、家族室等の爲めに、多數の部室を提供せり。而して、此の城

ヴェーマンの觀察所感

内に在りて或は勉學し、或は遊戲せる兒童は、各國人を合せて、其の數百五十人より二百人を出入せり。

吾等の捕虜遊戲は、屢此の中庭に始まれども、終に擴大して城外湖畔の原野に至りて終ること屢なりき。而して、冬季に至れば、攻防共に大仕掛なる雪合戦をなすを常とせり。當時吾等の間には、一人の疾病に罹れるものなかりき。

吾等は、毎朝早く起床して、交互に冷水浴をなせしが、皆跣足なりき。されど、冬季に至り寒風吹き荒み、若しくは、寒交りの疾風「イフェルテン」の廣場を吹き拂ふ時に至れば、多くは、皆逃れて之に出でざりき。嘗て、余の父は、余を思ふ親心に、一個の新しき帽子を余に贈れり。然れども、校友等は、余の之を被ふるを見るや、忽ち帽子！々々の叫聲彼等の間に起り、何人か、余の頭上より之を

奪ひ取り、見る々々、數百餘りの手より手に投げ渡され、さては、空中中庭廊下等に投げつけられしが、やがて、窓より轉がり飛びて、城外の小川に落ち、湖水に流れ去りたりけん、余は遂に之を發見するを得ざりき。

吾等の教師は、多くは猶青年なりき。或者は、革命時代に孤兒となり、彼等と吾等との共同の父老たる「ペスタロッチ」の養育するところとなれるものなりしが、或者は、又教育素養ある者にして、教育事業の爲めに、此の學舎に來れるものなりき。然れども、概して多大の學問ある者はあらざりき。余は嘗て、彼が四十年間一冊の書籍をも讀みたることなしとの、晩年の傲語を聞きたることありしが、彼の門人たりし吾等の教師も、亦多くは讀書をなさざりき。彼等の教授法は、記憶よりも寧ろ悟性に訴へ、神の

一七八  
ヘスタロッチーの生涯及事業  
我等に賜へる萌芽を調和的に啓發するを以て目的とせり。常に兒童を發展せしむべく努力せよ、犬を馴らすが如く兒童を訓練する勿れ。かくの如きは、現在多數の學校に於て見るところの教育法なり。』とは彼の屢繰り返へせる金言なりき。

吾等の學習は、殆ど全く物形言語の三者を基とせり。言語は感覺印象の助けに依りて教授せられたり。吾等は、正しく見ること、を教へられ、従つて、物體の關係に關する正當なる觀念を作ること、を教へられたれば、全く理解したるものを、明白に發表するに何等の困難を感じざりき。

地理の初歩は、土地に就きて實際的に教へられたり。吾等は、初め、イフェルテン附近のブーロン川の流れ出づる、狹隘なる河領に導かれ、先づ全般を觀察學習せる後、各部に及び、精確にして完

全なる直觀を得るまで研究せしめられたるが、歸途、河岸に在りたる粘土を持ち歸るべきことを命ぜられたれば、各、大なる籃に充たして歸りしに、歸校の後、各、長き机の前に席を定めて坐し、當日學習したる河領に就き、受け持ちを定めて模型を製作せしめられ、翌日、又郊外に行き、更に前回以上の學習をなして、歸校後、又製作を爲し、連日かくの如くにして、吾等は、モンテラ山の頂上より、ブーロン河領の鳥瞰全景を研究し終り、従つて、又、此の模型製作を終りたるが、是に於て、吾等は、始めて此の模型より地圖に入りたり。

吾等は、又幾何學の原理を、自から發見せしめられたり。教師は吾等を導き、吾等の達すべき目的を示し、其の方法をば、全く各自の研究に残したり。算術も、亦同様にして筆紙を用ひず、只發

全學舎の  
覺悟

聲を許して暗算にて獨立に計算せしめたり。かくて、吾等は驚くべき程迅速なる暗算に熟達し、連日「ペスタロッチー」の名聲を聞き、來訪する多數の參觀人の前に出てしめられたり。吾等は常に吾等の間に一大事業の進行しつゝあること、並に之が爲めに世界の耳目を集中せしめつゝあるを告げられたるが、何人も實に然か之を信じ居たり。

「ペスタロッチー」の教授法なるものは、誇大的に吹聴せられたるが如く、實は吾等に取りても、教師に取りても、一個の謎なりき。吾等の教師は、恰かも「クラーテリス」の門人の如く、己自身の方法にて、其の師の學説を紹述したり。然して彼等は各自説を以て、其の師の學説を眞に代表するものと信じて、互に相争ふに至り、後年に至りては、其の結果「ペスタロッチー」も、自から理解することを得ざりきとの宣言となりて終りたり。

更に又「シヤヴァンヌ」の Chavannes の編せる「ペスタロッチー」の傳記

(1863)中には、「ワード」縣の出身にて、當年、此の學舎に入りて學び、其の後、牧師となれる一生徒の談話を記載したり。

佛人の觀  
察所感

『余が千八百八年六月、イフェルテンの學舎に入りし時は、恰かも余の年齢七年六ヶ月に達せる時にして、此の學舎の歴史の最も光榮ある時代なりき。當時學舎内には、管に瑞西のみならず、獨逸、佛蘭西、西班牙、伊太利、露西亞の諸國人の子弟より、米國人さへも在學し、兒童の總數百三十七人に上れり。數學の教授は、十二歳の兒童等が、能く  $\frac{2}{3}$  の内に  $\frac{3}{5}$  は幾個ありや。又は  $\frac{1}{2} \times \frac{1}{3}$  然  $\frac{11}{60}$  にて  $\frac{3}{5}$  等の問題をも、全く暗算にて解する程上達せり。然れども、宗教的感情、就中、信仰上の陶冶は、等閑に附せられ、余は暗

算獨逸語等の課業は大に授けられたるが、聖書の講讀並に之れを衷心より學ぶことは、殆ど教へられたることを記憶せず。毎朝ベスタロッチーは大講堂に教員生徒を集め、徐かに室内を歩みつゝ、宗教的講話をなしたれども、全く獨逸語なりしと、彼の發音不明瞭なりし爲め、余は毫も之より利益を蒙りたることなかりき。體育に關しては、食物及清潔の點に於て尙遺憾多かりき。

最初、余は郷里と父母に遠く離れたりし故に、甚だ悲みしも、次第に萬事に慣れ來り、教師は、又吾等のあらゆる遊戯に加はりられたると、吾等は、全く自由を與へられ、教師に對しても、常に親密なる二人稱を用ひて敬語を用ふる事を免ぜられたる等に依り、益々教師に信賴し心服したるが、余は特に卓越なる校長ベスタロッチーに對しては、衷心より敬愛したり。余は今尙半洋服を穿ち、

カラ、も、頭髮も鬚髯も亂れたる親切なるかの老人を眼前に見るが如き心地せり。彼の眼は敏くして、而かも優さしき見えを有し、彼の唇に親切なる微笑を湛へたる有様は、男子となく、婦人となく、小兒となく、何人も、皆彼を信愛せざるはなく、又彼の熱愛的の抱擁を喜ばざるはなかりき。

三、イフェルテン學舎の全盛 當時、獨逸諸國は、佛帝ナポレオンの爲めに、數次の蹂躪を被りしが、普魯西王フリードリッヒ、ウイヘルムは、國民教育を盛にして、漸次に國力を回復せんことを期し、皇后ルイゼも、夙に亦、彼の名著リンハート、ウント、ゲルトルドを讀みて、其の精神に感奮したるを以て、教育家ツエラー、Nothを派して、彼の教授法を研究し、伯林に新小學校を創建せしめ、別に又文部大臣アルテンシュタインをして、學生をベスタロッチーに委託せしめ、其の他、

丁抹和蘭の諸政府も、遠く教員を派して、彼の新教育法を講究せしめられたれば、當時是等外國留學生の總數のみにても四十人を出てたることあり。而して、嘗に是等の教育家のみに止らず、今や貴族學士、商人、銀行家等に至るまで、ベスタロッチーの風采を想望し、續々として來遊するに至れり。

かくの如くして、千八百五年以後の數年間、此の學舎の全盛を極めたる時代に於て、上は能く帝王將相の贊同、嘆賞を博し、下は能く田夫野人の信頼を維ぎ、歐洲諸國は勿論、遠く北米等の各國より、も來遊觀察の士、日として之あらざるはなし。實に、眇たる一箇の小學校にして、此くの如く世界の耳目を聳動せしめたるもの、古來未だ曾て有らざりしなり。當時、親しく彼の學舎を見舞ひて、彼と會見し、或は親愛なる文書を交換せられたる者には、露帝アレキサ

歐洲名流の來遊

ンダー、普王フリードリッヒ、ウイヘルム三世、和蘭王ルイ、ザクセン、マイニンゲン女公、ウキルテンベルヒ公、フェルチナンド、バリエルン皇太子、ルドキッヒ、イストリア公、サッポ、ボヘミヤ、大法官兼伯林の樞密顧問官、デルブルク、普國教育高等顧問ツエラー、ケイニヒスベルヒの學校顧問ギーゼブレヒト、ボッダム師範學校長ヒンチュ、ドレステンの學務官プロッホマン、ダムムスタットの教育高等顧問シャット、佛國の將軍チリ、コスチウスコ、政治家、タレイラン、イセンブルグ伯、獨逸の哲學者フヒテ、數學者シユダイネル、近世地理學の祖カール、リッテル、教育史家ラウメル、教育家フロエーベル、英國教育家、ベル等の諸名流を包有せり。かくて千八百九年に於ては、此の學舎は百六十五人の生徒を有し、内百三十七人は全く校内に寄宿し、八十七人は外國人の子弟なり。

き。而して見習教員の數、三十二人(内二十七人は外國人)に上り、別に城外附近に、小規模の女學校あり。十二人の教員見習を有したり。是を以て、外面より之を觀察するときには、今や此の學舎は、只、満足と希望との空氣を以て充されつゝあるが如しと雖も、深く其の地中に横はれる根帯に於ては、業に既に、怖るべき腐朽の徴候を現はしたり。而して、先づ之を發見したるものは、實に「ペスタロッチー」其の人なりとす。

イフェル  
テン學舎  
の衰因

四、イフェルテン學舎の衰因 蓋し兒童の能力は、自然的進路に従ひて之を啓發し、活動せしむることに依りて、大に發達せしむることを得べしとは、彼が教育思想の根本を爲せる最も有力なる新主義なりき。然れども、今や此の學舎に來遊せる兒童の數は、漸く多數に上り、且つ、諸外國より來れる者には、年齢稍長じたる少年混淆

事情の變  
化

し、彼が積年の主張たる啓發及習練を施すを得ざるに至れり。次に、彼は其の全學舎を家庭的に結合せしめ、之を基として教養訓練を施さんことを期せり。然るに、今や、此の學舎は民族國語歴史風俗文明を異にせる諸國民の子弟の老然たる集合體となりしを以て、兒童は尙、彼を呼ぶに「ファーター」の尊稱を以てせりと雖も、彼は、もはや彼等を見ること子の如くなるを得ず、漸く組織的軍隊的とならんとする傾向あり。今や、彼の學舎の特徴たりし愛情と和合とは、著しく減退し、従つて、從來各員の心裡を支配せる謙抑謹慎素朴無邪氣等の要素は、益減少して、自主的利己的精神増長し、猜忌反抗の感情亦加はりて、動もすれば衝突せんとする虞あり。加ふるに、外國留學兒童は、多く富裕の子弟なるを以て、或は驕奢に陥りたれば、他年、彼が主唱し計畫せんことを欲せる下層民の教育に依り



1808.

て、社會を改革せんとする事業は、此に一大頓挫を生ずるに至れり。此くの如く幾多の矛盾撞着は、大に彼を失望せしめ、千八百八年一月に於ける彼の新年の辭は、憂愁の氣分に充たされ、

「從來余が爲し來れるものは、全く過失の拾集に過ぎざりき。今や余の往くべき途は只死の一あるのみ」

とさへ結ぶに至れり。是れ勿論、彼の性質より出でたる謙讓の辭なるべしと雖も、彼の心中には、既に一種言ふべからざる憂憤・悲痛の情の蟠かれるものあるを知るに足るべし。

然れども、若し彼の門人教師にして、悉く覺醒し、眞に協力一致して、彼の爲めに盡し、而して又全學舎の經營に任ずるに至らんか、彼の憂懼は、只一場の杞憂たるに止まりしなるべしと雖も、不幸にして、彼の門人中最も有力にして、且つ彼の股肱たるべき二大教師は、

漸く相争ひ、之に加ふるに、彼は、創業の才に富むと雖も、全校を管理し、人才を駕御し、事務を經營する才能に乏しかりしを以て、其の學舎をして益々悲境に陥らしむるに至れり。

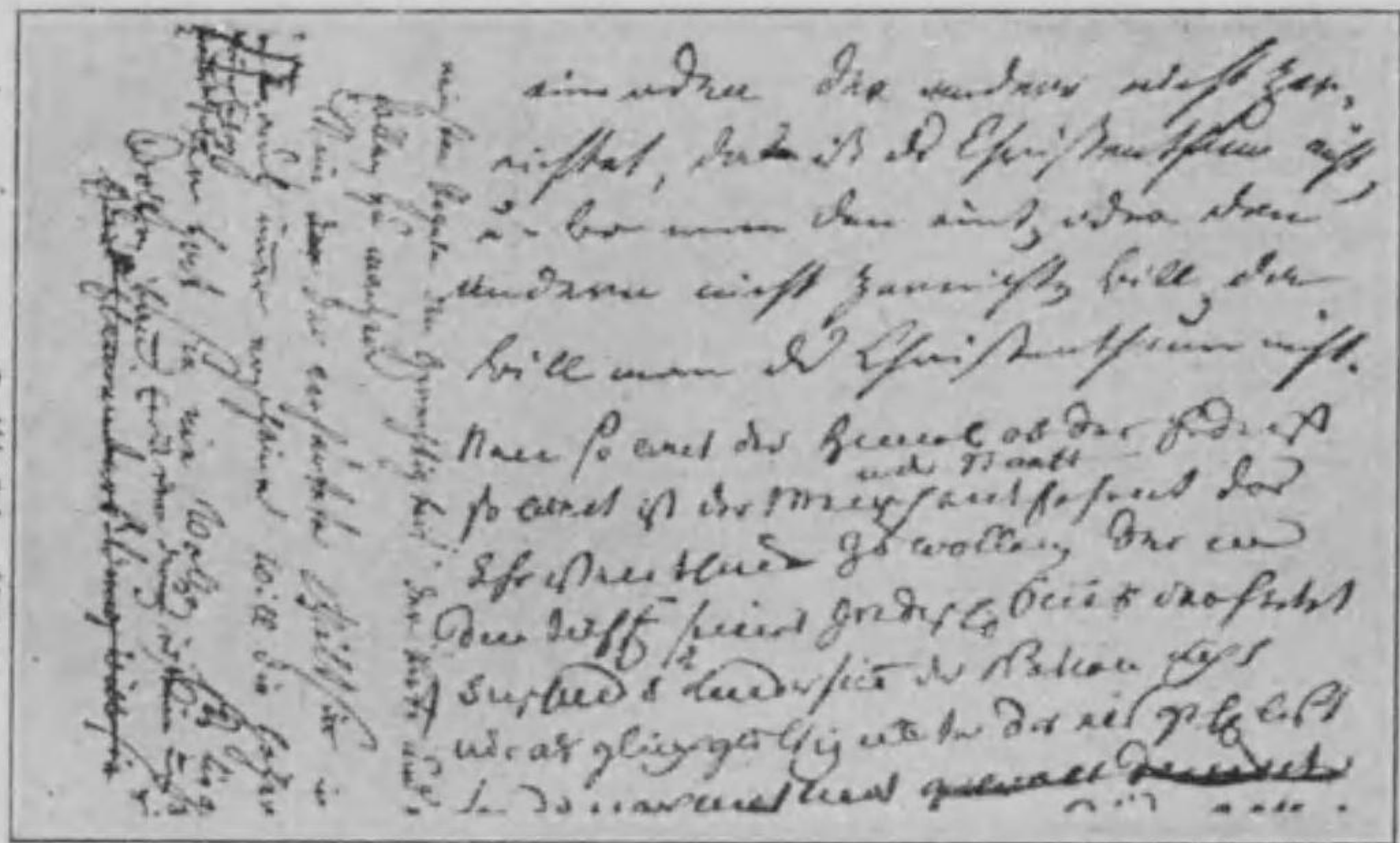
### 第九章 イフェルテン學舎の没落

ニーデラー及シュミッド衝突の原因——ペスタロッチー反對學派の攻撃——  
視察委員の來校及評論——學舎改革論の衝突——シュミッドの退去——財政の窮乏——ペスタロッチー夫人の死去——シュミッドの横暴——教員團の退去——貧民學校の創立及併合——學舎の衰頹——門下及市との葛藤——縣議會の壓迫とイフェルテン退去

一、ニーデラー及シュミッドの衝突 「ペスタロッチー」の門人にして、「イフェルテン」に在りし教員中、彼の事業を經營するに方り、其の股肱となり、雙翼となり、最も有力にして、且つ最も有名なるものを、ニー

門下の二  
大教師

ニーデラ



(行五上) 蹟筆のーチッロタスハ

(行七下) 蹟筆のルエウザムラ

ニーデラーの筆蹟(側方)

デラー及シュミットの二人とす。  
 ヨハン・ニッデラー、Johann  
 Nideler. 外アツペンツェル縣  
 の人にして、哲・學・博・士の學位を  
 有し、ブルグドルフ學舎の開設  
 せられたる當時、ライントール  
 地方のゼンワルドに牧師たり  
 しが、親友トブラーに依り、ベス  
 タロッチーの事業を知りて、大に  
 感奮し、自から彼の學舎に加ら  
 んと決意し、千八百三年、二十四  
 歳にして其の神職を去り、初等

教育の事業に來り投じたり。彼は、大學教育を受け、宗教を研究し、  
 思索に長じたるの故を以て、宗教々授を擔任せしが、漸次に學舎内  
 の重要勢力となれり。「ベスタロッチー」は、初め彼の哲學的見解を了  
 解せざりしも、漸く自己の教育意見の斷片的にして不完全なるを  
 悟り、之を組織統一するの必要を感じ、大に彼を信賴するに至れり  
 かくて、ベスタロッチーの思想方法に、哲學的形式及系統を附し、或は  
 學舎内の教師に講話し、或は著作を整理して、獨逸語國民間に之を  
 普及せしむるの任務に當り、權勢全學舎内に、匹敵するものなし。  
 人呼んで、教授法の哲學者。Der Philosoph der methode. と稱せり。ベス  
 タロッチーは、時々他人に對し、素朴率直に告白して、  
 「余は、余自身を説明すること能はず、若し諸君にして余の思考  
 し、企圖するところのものを知らんと欲せば、乞ふニ、ニッデラーに

行きて問ひ給へ』

とまで云ふことあるに至れり。然れども「ニーデラー」は此の學舎の經營に關しては、何等實地の手腕なく、只忠實なる學者としての尊信を得たるのみ。

「ヨセフ、シュミッド」 Joseph Schmid は、チロル山間の牧羊兒にして、幼時何等の教育を受けず、所謂「自然の子」として成長せしが、千八百一年、ベスタロッターの學舎に來りて、始めて教育を受けたるに、拔群の學才あり、修學僅に三年十七歳にして「イフェルテン」學舎の助手に選拔せられ、大に才能を發揮し、數學及圖畫教授を擔當して、大なる成功を收め、常に來觀者の驚嘆を博せるのみならず、教授管理訓練等の實際的手腕に於て、他に比すべきものなく、又忠實勤勉なると精力絶倫なるを以て、ベスタロッターの愛するところとなり、大に學舎

シュミッド

二人の衝突の原因

内に權勢を得たり。

かくの如く、二人の性向主張相異り、且つ相理解することなくして、互に他を輕視せるを以て、動もすれば相衝突せんとせり。「シュミッド」は、彼が最初より擔任したる幾何算術の教授及「ブース」の退去以來、擔任したる圖畫教授に於て、改良し成功したるところ大なりしを以て、之に關する三種の著作を出版せり。然るに、當時「ニーデラー」は、此の學舎内より刊行する凡ての著作及文書を檢閲し、修正する特權と任務とを有せるに、シュミッドは、何等「ニーデラー」の承認を経ることなくして、其の著作を公にせり。是を以て、「ニーデラー」は、大に「シュミッド」の專横を憤慨したり。

27「ニーデラー」、「シュミッド」二人の争闘の他の一因は、「Mort」の研究に依れば、當時兩人共に、女教師「ルイゼ、ゼーゲッサー」 Louise Seeger の愛を得ん

ことを競ひしが、ニーテラーは彼女と婚約を結ぶに至れるを以て、「シュミッド」の意大に平かならず。終に、兩者の反目嫉視、益々甚だしきに至れるなりと云ふ。然れども、ニーテラーは、後、他の婦人と結婚せり。

是に於て、ペスタロッチは、百方兩者の調和融合を圖らんと欲したれども、其の効なく、禍害は益々増大し、危機漸く内部に於て切迫したり。然るに、外部に於ても、彼に反對する一派は、諸新聞に於て此の學舎攻撃の聲を高めたり。然れば、千八百八年新年の辭に於て、彼は

「吾等が嘗て永恒なるべく思ひし學舎の結合も、今や即ち破れ、愛情の連結は全く消え失せたり」

と悲痛の聲を漏らしたり。此の歳、トブラー・ホツプ・バーラウド、「シュタイナー」四人の教員各、歸國して、一部有力なる要素を失へり

是に於て、校内の教員は大に感動し、益々熱心に、兒童の教授訓練に従ひしが、當時、外部に於ける「ペスタロッチ」攻撃の聲漸く大なりしを以て、「ニーテラー」は特に「瑞西議會」に乞ひて、公然此の學舎を視察し、實際の價值如何を判定せられんことを要求すべしと主張したり。然るに、「シュミッド」は、獨り此の學舎の弱點を詳知せるを以て、絶對に之に反對せしも用ひられず。遂に千八百九年六月、ペスタロッチは、學舎視察の請願書を瑞西議會に提出するに至れり。

二、「ペスタロッチ」の反對學派 抑、世の革新的大事業が、頑冥固陋の徒の反對攻撃に會することあるは、古來幾多の實例に依りて怪むを要せざるところなるが、ペスタロッチの如き、人道的社會的教育的事業も、其の盛大を極め、其の學舎の教育が、殆ど世界的に喧傳せらるゝに至るや、反對者の數亦漸く多きを加へたり。固より、彼は